
久遠の神話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久遠の神話

【Nコード】

N2979V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

十三人の剣士達。生き残る一人だけが願いを適えられる。

この戦いを動かしているのは誰か、そして何故剣士達は戦う運命にあるのか。現代を舞台としたバトルファンタジーです。

第零話 炎の覚醒その一

久遠の神話

第零話 炎の覚醒

ごくありきたりのリビング。木の床のその部屋のやはり木のテーブルに座ってだ。彼は今はトーストを食べている。

彼の後ろの台所ではエプロンを着た四十代の女がだ。黒いフライパンで何かを焼いている。そうしながらだ。彼に尋ねてきた。

「ねえ」

「何だよ」

「あんたベーコンエッグ食べるわよね」

こう彼に問うたのだ。細長めの顔に垂れた奥二重の目、眉は黒く一文字でそれぞれ斜め上にあがっている。唇はしっかりと横にあり鼻は高めでいい形をしている。髪は耳が隠れるまで伸ばし黒い。その彼がだ。

トーストを食べながらだ。こうその女に言うのだった。

「ああ、今焼いてるんだよな」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。女も彼に答える。

「まずはお父さんのをね」

「ああ、親父のなんだ」

「お父さんはハムエッグが好きだから」

見ればだ。実際にフライパンにあるのはハムエッグだった。白身と黄色い卵の部分に赤いハムの色もある。そこから美味そうな匂いもあがっている。

「それでまずはね」

「親父のなんだ」

「次にあんたよ」

彼だというのだ。

「あんたの次はね」

「あいつだよな」

「和歌子は起きたの？」

「起きたんじゃないの？」

彼の返答は実に素っ気無いものだった。

「そろそろ朝練の時間だしさ」

「ちよつと見てきてくれる？」

母は焼いたハムエッグを皿に移しながら彼に言う。

「今からね」

「えっ、何でだよ」

「遅刻したら駄目じゃない」

それでだとだ。彼に言うのだ。

「部活つていつてもね。だから起こしてきて」

「あいつが勝手に起きるだろ」

不機嫌になった声でだ。彼はトーストを食べながら母に言葉を返す。

「そんなの別にさ」

「嫌なら別にいいわよ」

彼の返答にだ。母はこう返すのだった。

「その代わりね」

「ベーコンエッグなしだっというんだよな」

「普通の目玉焼きになるわよ」

つまりだ。ベーコンを入れないというのだ。ベーコンを入れないと何になるか、何の変哲もない目玉焼きになってしまう。見事な恫喝であった。

「それでもいいのね」

「目玉焼きになるのかよ」

「それでどうするの？」

こう問い返す母だった。

「どっちがいいの？」

「ベーコンエッグに決まってるだろ」

彼の返答はこれだった。

「目玉焼きとベーコンエッグじゃな」

「全然違うわよね」

「わかったよ。今起こすよ」

彼は嫌々といった顔でだ。携帯を胸のポケットから出してだ。

そのうえでだ。メールを入れたのだった。

それを済ませてからだ。母に言った。

「起こしたぜ」

「あんたねえ」

「携帯でもいいだろ」

こうだ母に話すのだった。

「そのアラームの音で起きるんだからな」

「それはそうだけれど」

「じゃあいいよな」

「まあね。それじゃあいいわ」

無然としているがそれでもだ。母は妥協した。

その印にだ。ベーコンを数枚出した。そしてだ。

そのベーコンをフライパンに出してだ。焼きはじめた。

それを焼いて卵も二つ落としてだ。それでだった。

彼にだ。こう言うのだった。

「はい、できたわよ」

「じゃあ食つか」

「全く。何でそう横着なのよ」

ベーコンエッグを皿の上に置きながらだった。我が子に言う。

第零話 炎の覚醒その二

「あんたって昔から」

「無駄な力ロリーは使わないんだよ」

「それを横着っていうのよ」

そんな話をしながら彼の前に皿を持って来た。黄色い気味のベークソングが実によく焼けている。しかも美味そうな匂いも出している。

それを出してだ。また言う母だった。

「大学生になつてもそれは変わらないのね」

「部活じゃ速さの中田って言われてるさ」

だからいいとだ。そうした口調だった。

「部活で動いてるからいいんだよ」

「そういう問題じゃなくてね」

また言う母だった。言いながら台所に戻ってだ。またフライパンを使っていた。

そうしながらだ。母は彼に言うのだった。

「こうした場合は動くものでしょ」

「わざわざあいつの部屋まで行ってかよ」

「ええ、そうよ」

「いいじゃないか、別にな」

またこう言う彼だった。

「起こしたんだからな」

「これで起きなかったらどうするのよ」

「またメール送るさ」

そうするとだ。中田はあっさりと答えた。

「それだけさ」

「本当に直行らしいわね」

母は彼の名前を呆れた声で言った。

「そういつところ誰に似たのかしら」

「多分爺ちゃんだな」

「お父さんに？」

母から見ればそうなる。それだからこそその言葉だった。

「お父さんに似たの」

「そうなんだろうな」

「そういえばお父さんって横着だけれど」

「だから俺は爺ちゃん似なんだよ。顔もね」

「そうね。顔はそっくりね」

母もそのことは認めた。

「それに剣道をやってるのもね」

「爺ちゃんに教えてもらったからな」

「お父さんも変なこと教えたわね。けれどね」

「けれど？何だよ」

「お父さんそこまで横着じゃないわよ」

それは違うというのだ。

「流石にね」

「じゃあうちの親父は」

「お父さんは丁寧でしょ」

今度は夫をこう言うのだった。彼女にとって父は二人いるのだ。

「それも凄くね」

「そういえばそうか」

「だから。あんたは横着過ぎるのよ」

こう言って我が子を叱る。またベーコンエッグを焼きながら。彼はその間にフォークとナイフを使って自分のベーコンエッグを食べている。

「本当にね」

「横着上等だよ」

「開き直ったわね」

「だから無駄な力ロリーは使わないんだよ」

「剣道でもそうなの？」

「そっちは速さの中田だよ」

また自分の仇名を言ってみせたのだった。

「そうなんだよ」

「そっちはカロリー使ってるのね」

「そうじゃないと勝てないからな」

「必要だから使うのね」

「そういうことだよ」

言いながらコップの中の赤い野菜ジュースを飲む。

「必要な時は使うからいいんだよ」

「それで生きていくのね」

「ずっとな」

「適当ね」

「適当か？」

「そっいつのを適当っていつのよ」

我が子にだ。半ば叱る様にして次げるのだった。

第零話 炎の覚醒その三

「全く。まあいいわ」

「あいつが起きればそれでいいよな」

「美和子がね」

「そのだ。彼女がだというのだ。」

「本当にそろそろよね」

「起きなければまた携帯でメールを送る」

「そうしてね」

「ああ、そうするさ」

そんな話をしながらだった。中田はジュースを飲みベーコンエッグを食べていた。そこにだ。

中田によく似ただ。中年の男性が来たのだった。白いカッターに黒と青のストライプのネクタイに黒のスラックスという格好である。その彼がだ。中田の顔を見てこう言った。

「何だ、御前だけか」

「あいつはもうすぐ起きてくるさ」

「そうか。美和子ももうすぐだな」

「そうになったら俺も何もなくていいしな」

「全く。御前はなあ」

中田に対してだ。その中年の男は呆れる様に話すのだった。

「昔からだよな」

「いいじゃないか。別に誰も困ってないだろ？」

「さっきもその話したのよ」

「母がだ。男に言ってきた。」

「適当ってね」

「ものぐさなのはよくないぞ」

「そうそう。まあ今言ったから」

「ならいいか」

「またね。それじゃあ今から」
「ああ、今朝は何なんだい？」
「ハムエツグよ」
「それだとだ。母は彼に話す。」
「お父さんの好きなね」
「おっ、いいな」
「ハムエツグと聞いてだ。彼、即ち中田の父は笑顔になって言った。」
「じゃあそれ食べて元氣をつけて行くか」
「そうしてね。今日も頑張つてね」
「母さんもだよな」
「ええ。スーパーのパートね」
「所謂共働きだ。パートでもそう言っている。」
「それにだ。母も行くというのだ。」
「頑張つて来るから」
「無理はしないようにな」
「お父さんもよ。課長になったんだから」
「いやあ、中間管理職は大変だよ」
「苦笑いしながらだ。サラリーマンに相応しいことを話す。」
「何かっていうと頼りにされてな」
「仕事回ってくるのね」
「残業も多いしなあ」
「そうよね。だからね」
「無理はするな、つてな」
「そういうことよ。くれぐれも氣をつけてね」
「母は父、自分の夫に強い声で話した。」
「過労にはね」
「働き過ぎて疲れたら何にもならないからな」
「こつも言つ父だった。」
「だからな」
「そつよ。氣をつけてね」

「じゃあまずは」

その為にだといってだった。

彼はだ。そのハムエッグを食べる。そしてだった。

野菜ジュースも飲む。そうしながら妻に話した。

「朝から一家団欒といきたいんだがな」

「最後の一人が今に来るさ」

中田は明るく笑って話した。

「今すぐにさ」

「だといいんだがな」

「まあ美和子はねえ」

ここで母がまたベーコンエッグを皿の上に置いてから話す。

「朝が弱いから」

「低血圧だからな」

「そうそう、それよ」

母は息子の言葉に応えた。そのうえでの言葉だった。

第零話 炎の覚醒その四

「お母さんに似てね」

「お袋もそうだったのか」

「そうよ。低血圧なのよ」

自己申告による言葉である。

「これでもね」

「けれど母さん毎朝ちゃんと起きてるじゃないか」

「努力してるのよ」

それでだというのだ。

「それでなのよ」

「努力だったのか」

「そうよ。朝は気合よ」

母はここでこうしたことと夫と息子に話した。

「起床ラッパで起きるのと同じよ」

「それじゃあ海軍だよな」

中田は母の今の言葉に首を捻って述べた。

「帝国海軍だよな」

「今の海上自衛隊もそうよ」

「ラッパで起きるのかよ」

「そうよ、それは今も同じよ」

「ラッパでなあ」

「そう、ラッパでね」

起きるのが海上自衛隊だというのだ。

「それは陸自さんや空自さんも同じだから」

「何処もラッパか、自衛隊は」

「そうよ」

まさにその通りだと応える母だった。

「それが自衛隊なのよ」

「ラッパってまだ使ってたんだな」

「使わないと思ってたの？」

「今は放送とかあるだろうにな」

「これが中田の意見だった。」

「それでも違うんだな」

「違うわよ。とにかくね」

「とにかく？」

「美和子は？」

妹の話がだ。また出て来た。

「まだ起きないの？」

「いい加減またメール送るか」

面倒臭そうな顔でだ。中田はまた携帯を出した。それからだ。メールを送ろうとする。しかしだ。

ここだ。セミロングのあちこちに癖のある黒髪にだ。縦に大きく切れ長めになっている目に白のブラウスと黒いミニスカートにハイソックスのだ。少女が来た。小柄でだ。体型もまだ幼い感じである。

その少女が来てだ。中田達に話すのだった。

「おはよう」

「やっと起きたわね」

母がだ。その少女にやれやれといった口調で話した。

「全く。毎朝遅いわね」

「低血圧なのよ」

こう返す少女だった。その癖の強い髪を手で触りながら。

「それでなのよ」

「毎朝そう言うわね」

「だって本当のことだから」

「全く。早く御飯食べなさい」

母は少女にまた言った。

「用意できてるから」

「朝御飯何なの？」

「トーストとベーコンエッグよ」

実際に皿の上にあるその二つを少女の前に出してだ。そのうえで言うのであった。

「はい、これ」

「有り難う、お母さん」

その少女美和子は笑顔で母の言葉二応えた。

そのうえでだ。まずはトーストと手に取って千切って口の中に入れてだ。それを食べながら中田に顔を向けて話をするのだった。

「さっきのメールお兄ちゃんよね」

「俺の他に誰かいるか？」

「残念だけれどいないわ」

トーストを食べながら兄に話す。話す間に野菜ジュースをコップの中に入れていいる。

「あんなメール送るのはね」

「だろ？すぐにわかっただろ」

「起きろって一言だったから」

それでだ。わかったというのだ。

第零話 炎の覚醒その五

「何かね。お兄ちゃんっていつもね」

「いい加減だっというのか？」

「っていうか本当に無駄な力ロリー使おうとしないわね」

「いざって時の為に節約してんだよ」

妹に対してもだ。言葉は同じだった。

「そうしてるんだよ」

「そういうのを世間ではね」

「ものぐさっというんだな」

「そうよ。まさにそれよ」

トーストを食べ続けながら話す。

「それ以外の何者でもないじゃない」

「何か俺いつもそう言われるな」

「言っわよ。実際にそうだから」

それでだというのだ。

「まあ起こしてくれたのはね」

「感謝しろよ」

「有り難う」

御礼自体はあっさりと言った。そうしてだった。

トーストの次はベーコンエッグを食べてだ。彼女は言った。

「とにかく。これ食べて歯を磨いてね」

「それで顔を洗ってだな」

「シャンプーもしてよ」

父に伝えて話す。

「それから学校に行くわ」

「色々やることがあるんだな」

「女の子はそうなのよ」

こう父にも話すのだった。

「それで朝の部活の後でね」

「御化粧もよね」

「それもしないといけないから」

今度は母に应运ての言葉だ。

「本当に色々としないとね」

「朝練の後でシャワーを浴びたらどうだ？」

兄が妹にこんなことを提案した。

「それならすつきりするだろ」

「それも悪くないけれど」

だ。だ。それでもだというのだ。

「そこまではね」

「しないのか」

「夕方の部活の後はずぐに帰ってお風呂だし」

これが美和子の日課だ。風呂も毎日なのだ。

「朝はシャンプーだけで充分よ」

「家でやるそれだけか」

「朝練はそんなに汗かかないし」

そうした事情故にだ。部活の前のシャンプーだけで充分だというのだ。

「だからね」

「俺はまあ。あれだけれどな」

「御風呂は一日を終えてよね」

「ああ、それだよ」

中田の風呂はそうしたものだった。

「やっぱりそれがいいだろ」

「まあ私はそれだとね」

「気持ち悪いかな？」

「だからなのよ」

それでだ。美和子は話すのだった。

「朝起きたらね」

「シャンプーなんだな」

「朝からシャンプーの匂いさせてる女の子っていいじゃない」

「いいか？」

「清潔な感じでね」

自分で言う美和子だった。

「いい感じじゃない」

「そうか？俺は別にな」

「そういう鈍感なのが駄目なのよ」

今度は目を怒らせて言う美和子だった。

「全くね。そんなのだからね」

「何だってんだよ」

「彼女できないのよ」

少し意地の悪い笑顔になったの兄への言葉だった。

第零話 炎の覚醒その六

「このままずっと彼女いないで通すの？」

「そんな奴いるかよ」

「ゲイの人だったらそうでしょ」

「俺はゲイじゃないからな」

そのことはムキになって否定する。

「俺だってちゃんと募集してるさ」

「募集してるだけじゃないの？」

「今度はそう言うのかよ」

「だって。実際に彼女いないじゃない」

この現実をあくまで冷酷に話す美和子だった。

「そうでしょ」

「そのうちできるさ」

「そのうちかよ」

「そうだ、そのうちだよ」

こう妹に返すのである。

「だから大丈夫なんだよ」

「だといいいけれどね。それはそうとよ」

「今度は何だよ」

「お兄ちゃん旅行行かないのよね」

美和子は話を変えた。そこにだ。

「そうよね」

「ああ、残念だけれどな」

そうだとだ。彼はまたとーストを食べながらそうだと話す。

「合宿だからな」

「大学の部活って多くない？」

「そんなに多いか？」

「この前あったばかりじゃない」

そのだ。部活の合宿がだというのだ。

「それでまたって」

「大会が近いからな」

それでだ。中田はトーストにマーガリンを塗りながら話す。

「それでだよ」

「大会ね」

「ああ、今年こそはってなってるからな皆」

「八条大学の剣道部って強いからね」

「ああ、余計にな」

「だからよね。成程ね」

それを聞いてだ。頷く彼女だった。

その話をしてだった。父と母も息子に話した。

「なら留守番頼むな」

「御願いな」

「犬の散歩と猫の餌御願いな」

「しっかりしてくれよ」

「わかってるさ。あいつ等のことは任せてくれよ」

ペット達のことはあつさりと受けるのだた。

「それじゃあ楽しくな」

「金沢だからな。土産は期待しておけよ」

「お魚たっぷりだからね」

「それはいいな」

魚と聞いてだ。彼もだ。

笑顔になつてだ。こう両親に言う。

「北陸って魚が美味いからな」

「だからな。楽しみにしておけよ」

「是非共ね」

「それじゃあ。楽しくやってきてくれよ」

笑顔で話してだった。彼は学校に向かうのだった。

バイクで大学まで行き講義を受けてから部活に入る。まずは黒い

ジャージを着て走った。それが終わってから同じ部の仲間達とこんなことを話すのだった。

「なあ、聞いたんだけれどな」

「何だ？」

「どうしたんだよ急に」

「何かフェシング部に凄い奴がいるって聞いたんだけれどな」
「こう仲間達に尋ねるのだった。」

「何ていったかな」

「ああ、牧村か」

「あいつのことか」

「すぐにだ。この名前が出て来た。」

第零話 炎の覚醒その七

「二年のдарろ？学部は知らないけれどな」

「あいつのことだよな」

「そうだよな」

「ああ、牧村っていうんだな」

話を聞いてだ。中田は納得した顔になった。ランニングの後の整理体操をしながらだ。仲間達の話聞いてそれで頷くのだった。

「そついうんだな」

「強いけれど相当無愛想な奴らしいな」

「口調が全然変わらないらしいな」

「そんな奴か」

「学部は。ええと」

「何処だった？」

学部の話になるがそれはだった。彼等の記憶にはなかった。

「まあ。わからないけれどな」

「とにかくそついう奴だよ」

「強いけれど無愛想でな」

「付き合にくい奴みたいだな」

「世の中色々な奴がいるからな」

中田はこう言うだけだった。

「無愛想な奴もいるよな」

「で、そつ酒飲めないらしいしな」

「甘党らしいぜ」

「それもかなりな」

「ああ、俺も甘いもの好きだぜ」

中田は甘いものの話を聞いてだ。笑いながらこつ話した。

「アイスでもチョコでもな。何だつてな」

「御前それに酒も飲むしな」

「ビールでもワインでも飲むよな」

「アルコールが強い酒は駄目だけれどな」

「それでもだ。飲むことは飲むというのだ。」

「けれど好きだぜ」

「結局甘いものも酒もいけるんだな」

「御前はそうだよな」

「ああ、ただ付き合うのは女だけだぜ」

「陽気なままこうしたことも言う彼だった。」

「男は駄目だからな」

「そっちは両方じゃないよな」

「まあ。流石にな」

「それが普通だよな」

「俺はホモは駄目なんだよ」

「そうだと話す彼だった。」

「ああいうのはどうしてもな」

「我が国はそういうのは寛容だけれどな」

「歴史上結構そういう人も多いしな」

「織田信長とか武田信玄とかな」

「上杉謙信もそうだよな」

彼等にそうした趣味があったのは判明している。織田信長が森蘭丸を傍に置いていたのも武田信玄が高坂昌信を傍に置いていたのもそれが理由だ。上杉謙信も直江兼続を育てたのもそうした理由もあったのだ。

「俺はそっちの趣味ないけれどな」

「俺も」

「俺もだよ」

「そういうのはな」

「こう口々に話す彼等だった。」

「俺達も酒も甘いものもいけるけれどな」

「付き合うなら女の子だよなあ」

「今度コンパあるよな」

「中田、御前もそれ出るよな」

「今度のコンパ」

「ああ、確かあれだろ」

中田もだ。コンパと聞いてだ。これまで以上に明るい笑顔になって仲間達に応えるのだった。そうしてそのうえでこうしたことを言うのだった。

「アーチェリー部とのだよな」

「ああ、それだよ」

「アーチェリー部の娘達とな」

「スタープラチナで合コンだよ」

「絶対に来るだろ」

「俺のライフワークだからな」

笑顔のままだ。こんなことも言う中田だった。

第零話 炎の覚醒その八

「コンパに参加して遊ぶのはな」

「ああ、じゃあ行くか」

「御前の名前書いておくからな」

「それじゃあな」

「さて、どんな娘がいるかな」

「明るい顔のまま話す彼だった」

「今から楽しみだぜ」

「おい、休憩終わりだ」

部長が彼等に言ってきた。

「今度は筋トレやるぞ」

「わかりました」

「じゃあ次はそれですね」

「ああ、それするぞ」

こう彼等に話すのである。やたら背の高い茶髪の青年だ。青いジャージを着ていてそれがかなり似合っている。その彼が部長だった。

「身体はほぐしたよな」

「はい、休めました」

「充分過ぎる位に」

「それならやるぞ。いいな」

こうしてだった。彼等は今日はそのままトレーニングを続けるのだった。

そしてその後でだ。彼等はだ。

合コンの日を迎えた。その日にカラオケ屋に入った。その店に入るとだ。

まずは星達が目に入った。そしてその次にはだ。

横浜ベイスターズの帽子を被った小柄な娘がカウンターに見える。黒のショートヘアの可愛い娘だ。しかしその表情はというと。

「ああ、ベ이스ターズ負けたか」

「うわ、今日も酷い点数だな」

彼等はカウンターの壁のそのスコアボードを見て言う。

「こっちは完封で向こうは二桁か」

「凄い惨敗だな」

「よくここまで負けるよ」

「全くだな」

こうだ。彼等は呆れながら言うのであった。

「広島相手に何処まで負けてるんだよ」

「今鯉が勝ったら阪神抜かされるよな」

「せめて。ここで勝ってくれないとな」

「困るんだけれどな」

「全く。ベ이스ターズもなあ」

「こんなのじゃな」

「今年も最下位か？」

不吉な、横浜ファンにとってはそうした言葉が出て来た。

「ここんところずっと最下位だからな」

「しかも負け方酷いしな」

「いい選手はどんどん出て行くからな」

「フロントは駄目だしな」

「もうどうしようもないだろ」

「暫くずっと最下位か？」

こんなことを話しているとだった。カウンターのその娘は。

無言だがそれでもだ。彼等をむっとした顔で見据えた。そうして

だ。

彼等にだ。その不機嫌な声で問うのだった。

「あの」

「ああ、何だ？」

「どうしたんだ？」

「御部屋はどこにされますか？」

こう彼等に尋ねるのである。

「それで」

「ああ、そういえば部屋何処だった？」

「予約入れてたよな」

「そうだったよな」

「予約ですか」

その不機嫌な顔で応えるカウンターの娘だった。

「今日の予約は五号室ですが」

「そうそう、そこそこ」

「五号室だよ」

「そこだったよ」

「わかりました」

声もだ。実に不機嫌なままだ。そしてだ。

彼等をその五号室に案内する。そこはパーティーができるだけ広かった。

まだ灯りは点いておらず暗い部屋にだ。壁に付けられている席がありテレビもある。そしてマイクに分厚い曲の番号が書かれた本、そうしたものが置かれていた。

第零話 炎の覚醒その九

その部屋に案内してだ。女の子は彼等に言ってきた。

「それじゃあ」

「ああ、後で女の子も来るからさ」

「その娘達も案内してくれよ」

「頼んだからな」

「わかりました」

やはりだ。不機嫌な返答だった。

「それでメニューは」

「ああ、じゃあこれにするか？」

一人がだ。壁にあるその貼り紙を見て言った。そこには二百円だ。お楽しみメニューと書かれている。その貼り紙を見ての言葉だった。

「これにな」

「ああ、それ止めておけ」

「絶対にな」

ところがだ。周囲はだ。その彼にこう言つのだった。

「そのメニュー横浜が負けると酷いからな」

「もう頼んだ酒に絶対に合っていない料理が出て来るんだよ」

「カレーに日本酒とかな」

「えげつないからな」

「狙ってはいません」

それは否定する女の子だった。

「安心して下さい」

「いや、それでも最悪の組み合わせになるだろ」

「ましてや今日横浜負けてるから」

「それじゃあな」

「絶対にそうなるだろ」

「今日も」

「そうかも知れません」

しかもだ。否定しないのだった。彼等のその言葉を。

「ですが味は手抜きしません」

「いや、それでも酒と野菜スティックとかはな」

「絶対に勘弁して欲しいから」

「だから他のもの頼むよ」

「何があってもな」

「そうですか」

そう言われてだ。女の子はだ。その話を終わらせてあらためてメニューを聞いてオーダーに書いてだ。それからこう彼等に話した。

「それでは。後でなのですね」

「ああ、後でな」

「女の子達が来るからさ」

「安心してくれよ」

「わかりました」

小さく頷いて応える女の子だった。そのうえでその場を後にするのだった。

そうしてだ。帰るのだった。それを見届けてからだ。

彼等はそれぞれの席に座る。その中で中田は言っのだった。

「もうすぐだよな」

「ああ、女の子達だよな」

「そうだよ」

こう友人にも返す。

「それと酒に食い物な」

「食い物はともかく飲み放題歌い放題だからな」

「たっぷり楽しめるぜ」

「そりゃいいな。じゃあ心一杯飲むか」

笑顔でだ。中田は言った。

「これからな」

「それで女の子だけねどな」

一人がその相手のことを話してきた。

「一人面白い娘がいるらしいな」

「面白い？」

「ああ、留学生らしいんだよ」

その娘がだ。面白いというのである。

「髪の毛の色とかそんなのが凄いらしいんだよ」

「可愛いのかよ」

「可愛いっていうか美人らしいな」

「それもかなりな」

「へえ、美人か」

その話を聞いてだ。中田はすぐに笑顔になった。そのうえでだ。

女の子達が来るのを待った。そして程なくしてだった。

「お待たせ」

「元気にしてる？」

「どうなの？」

女の子達の明るい声が部屋に入ってきた。見ればだ。

第零話 炎の覚醒その十

派手で露出の多い、所謂勝負服を着てアクセサリーも身に着けた女の子達がやって来てだ。そのうえで中田に対して声をかけてきた。その彼等にだ。中田の仲間達が笑顔で応える。

「今来たところだよ」

「丁度今な」

「あのベ이스ターズの帽子の女の子に案内されたんだよな」

「そう、明日夢ちゃんにね」

「この部屋って言われてね」

「すつごく無愛想にね」

この言葉も付け加えられる。

「いつもっていうか横浜が勝ってたらね」

「凄く愛想いいんだけれどね」

「けれど。今日は負けてるから」

「しかも惨敗だから」

それでだというのである。

「今日は機嫌悪いのよね」

「それもかなりよね」

「まあ。いつもだけれどね」

「横浜が負けるのはしよっちゅうだから」

「何だ。知り合いなんだ」

剣道部員の一人がここでこう彼女達に言った。相手は彼等の向かい側に座ってきている。そのうえで話を続けるのだった。

「あの娘と」

「っていうか明日夢って名前だったんだな」

「はじめて知ったよな」

「そうだよな」

「いい娘よ」

このことは保障する彼女達だった。

「確かに狂信的な横浜ファンだけれどね」

「それでもいい娘よ」

「明るくて仕事もできるし」

「このお店の娘さんでね」

「ってこの店の娘さんだったのかよ」

「そうだったんだな」

彼等のはじめて知る真実だった。

「誰かって思ってたけれど」

「そういう娘だったのかよ」

「そう、このビルのオーナーさんの家でね」

「スタープラチナの看板娘なのよ」

「アルバイトとは少し違うから」

「そのことはわかっておいたらいいわ」

こう笑顔で話していくのだった。そうした話をしてからだ。

あらためてコンパに入る。その場には。

銀色の見事な髪を後ろに伸ばし束ねてだ。そうしてである。

緑のエメラルドの如き目はやや切れ長で二重である。睫毛が長い。顔立ちはほっそりとしていて鼻立ちが整っている。色は何処までも白い。

長身ですらりとしている。長い足を黄色いスラックスで包んでいる。そのブラウスは薄いレモン色だ。その彼女がだ。中田の前に座っていた。

中田は本能的にだ。彼女に声をかけた。

「あのさ」

「はい」

その銀髪の美女もだ。彼に応えてきた。

「君だよ。その留学生って」

「私がどうかはわかりませんが」

美女はこう前置きしてから中田の言葉に応えてきた。

「私は確かに留学生です」

「やっぱりそうなんだね」

「ギリシアから来ました」

こう答えるのだった。

「あの国からです」

「ギリシア人なんだ」

「そうです」

中田の言葉にだ。こくりと頷いての言葉だった。

「国籍はそうなります」

「わかったよ。それでこの国に来たんだ」

「はい。ただ」

「ただ？」

「父が日本人でして」

それでだというのだ。

第零話 炎の覚醒その十一

「名前は日本の名前になっています」

「えっ、名前はそうなんだ」

「銀月聡美といます」

「こう名乗るのだった。」

「これが私の名前です」

「それで部活は」

「はい、アーチェリー部です」

「そうだよな。アーチェリーは向こうにいた時から？」

「ずっとやっています」

「このこともだ。美女、即ち銀月聡美は話した。」

「長い間」

「長い間って？」

「遙かな昔から」

「不意にだ。聡美はこんなことを中田に話すのだった。」

「そうしています」

「あのさ、遙かな昔って」

「中田はすぐにその言い方に突っ込みを入れた。」

「幾ら何でもさ」

「はい？」

「ないんじゃないかな」

「笑ってだ。こう聡美に話すのだった。」

「だって俺達大学生だよ」

「だからですか」

「そんなさ。遙かつて」

「笑いながら聡美にまた言う。」

「大袈裟だよ」

「あっ、そういえば」

聡美もふと気付いた顔になってだ。それで言葉を返してきた。

「私大学生ですから。日本の」

「で、幾つなの？」

「二十になります」

「何だ。俺と同じ歳じゃない」

「ええと。お名前は」

「中田っていうんだ」

笑顔で名乗る彼だった。

「中田直行っていうんだ」

「中田さんですか」

「そう、宜しくね」

「わかりました」

「それで銀月さん」

中田の方から聡美に対して言う。

「あんた趣味とかあるの？」

「趣味ですね」

「やっぱりあれかなアーチェリーかな」

「はい、それと」

「それと？」

「スポーツなら何でもです」

少しおずおずとした調子で中田に話す。

「しています」

「スポーツ大好きなんだ」

「兄も好きですし」

「ああ、お兄さんいるんだ」

「双子の兄です」

兄弟もいるとだ。中田に話す聡美だった。

「ギリシアにいます」

「ふうん、そうなんだ」

「兄はスポーツの他に音楽も好きで」

「何か凄いね」

「占いもします」

兄のことをだ。聡美は中田に問われる前に話していく。

「ただ私はスポーツ以外は」

「音楽は駄目なんだ」

「しない訳ではないですが兄程は」

「成程ね。お兄さん凄いんだ」

「かなり」

「うっん、羨ましいなあ」

中田は聡美の話を聞いて心から憧れの言葉を述べた。

「俺ってさ。音楽とかは好きだけれど」

「御自身でやられるのは」

「駄目なんだ。絵は好きだけれどね」

「絵、得意ですか？」

「芸術学部じゃないけれど自信はあるよ」

「今度見せてくれますか？」

「よかつたらね」

気さくに返す。彼にしてもまんざらではない。

第零話 炎の覚醒その十二

その彼にだ。聡美はこんなことを言った。

「あの」

「うん、何かな」

「これからです」

「これから？」

「何があっても絶望しませんか？」

「こつ彼に問うてきたのである。彼のその目を見ながら。」

「中田さんは。何があっても」

「ああ、絶望ね」

「今度も笑いながらだ。そうして返す中田だった。」

「俺つてそういうのとはさ」

「縁がないんですね」

「うん、ないんだ」

「陽気そのものの声での返事だった。」

「全然さ」

「じゃあ何があっても」

「そついうのはないよ」

「また答える彼だった。」

「何時でも明るくユーモアが俺の信条なんだよ」

「明るくですか」

「くよくよしたつて仕方ないじゃない」

「そうですね。本当に」

「だからそれはないから」

「こつ聡美に話すのである。」

「安心してよ」

「わかりました」

「で、銀月さんはどうなの？」

中田は聡美にそのまま話を切り返した。

「絶望したことっていうか。そんなことは」

「気にしていることはあります」

俯いた顔になってだ。聡美は言ってきた。

「ずっと」

「ずっと？」

「友人のことで」

そのだ。友人のことだというのだ。

「私の姉の様な存在の。友人のことで」

「ふうん、そのお友達のことです」

「はい、気にしています」

そうだとだ。中田に話すのである。

「そのことがどうしても」

「友達思いなんだね」

「大切ですから」

だからだというのである。

「それで」

「で、その人って今どうしてるのかな」

中田は自然に聡美に尋ねた。

「日本にいるのかな」

「はい」

聡美は中田の今の問いに小さくこくりと頷いて答えた。

「います」

「そう、この国に」

「ただ」

「ただ？」

「日本の何処にいるのかは」

それがだ。よくわからないというのだ。

「そこまでは」

「？それってやばくない？」

中田は聡美の話、彼女の国籍も踏まえて考えてだ。怪訝な顔で述べた。

「その娘。女の子だよね」

「そうです」

「女の子で。留学生なのかな」

「そうなります」

「留学生の娘が住所不定って」

「この町にいるのは間違いないですが」

聡美はこうも話す。

「八条町ですね」

「うん、八条町だよ」

町の話にもなった。彼等が今いるのはその町なのだ。兵庫県の神戸市にある。そこに八条大学もありだ。そうして通っているのだ。

第零話 炎の覚醒その十三

「で、その人つてこの町にいるんだ」

「それはわかっています」

「その娘の家は」

「部屋があります」

聡美は既に部屋という言葉も知っていることが今の言葉でわかった。

「そこにいる筈なのですが」

「それでもなんだ」

「何時行ってもいません」

「放浪癖あるんだね」

「そうです。簡単に言う」と

「厄介だね。っていうかその娘もやっぱりうちの学校の生徒さんだよね」

部屋と聞いてだ。中田はこう考えて問うた。

「そうだよね」

「そうです。それも私と同じです」

「それで大学に通ってなくて」

「することがありますから」

聡美は不意にだ。こんなことも言った。

「ですから」

「することって？」

そしてだ。中田もだ。こう彼女に問い返した。

「何それ」

「あつ、それは」

「どうも訳ありな娘みただけけれど」

「何でもありません」

言葉を打ち消した。慌てた動作でだ。

「気にしないで下さい」

「そうなんだ」

「はい、それで」

「それで？」

「中田さんは剣道をやってますね」

「そうだよ。これでも腕には自信があるからさ」

中田は剣道の話になると明るい笑顔になって話を始めた。

「ボディーガードでも何でもできるよ」

「そうですか。そこまで」

「これでも負け知らずなんだぜ」

「そうそう、こいつ強いよ」

「動きも速いししかも二刀流でさ」

「相当なもんだから」

中田の周りにいる剣道部の面々が酒やピザを手にとってきた。無

論彼等も剣道部である。

「ただ。性格は軽いからさ」

「そこは注意してくれよ」

「結構いい加減だから」

「おいおい、それはないだろ」

仲間達の言葉に中田は困った顔になって言い返す。

「俺はこう見えても真面目だぜ」

「何処がだよ」

「何処が真面目なんだよ」

彼等は茶化すように笑ってた。彼に言う。

「御前が真面目だったならそれこそだよ」

「世界中真面目な人間だらけだろ」

「いつも適当だからな」

「何をするにしても」

「俺は必要なこと以外には力を使わないんだよ」

ここでもこんなことを言う彼だった。

「セーブしてるんだよ、セーブ」

「手抜きはセーブって言わないだろ」

「ったく、何から何まで手を抜くんだからな」

「本当に大事な時以外は手を抜くからな」

「それをいい加減っていうんだよ」

彼等のこうした言葉を聞いてだ。聡美は笑わなかった。本来ならば笑う、それもくすりとした笑いになるところだがそれでもだ。彼女は笑わなかった。

真面目な顔で聞いてだ。こう言うのである。

「そうですか。そういう方もまた」

「また？」

「またって？」

「なるのですね」

聡美の言葉だ。

「そうなのですね」

「なるって？」

「一体何に？」

「あつ、何でもないです」

まただ。周りに言われて言葉を打ち消す聡美だった。

第零話 炎の覚醒その十四

そして誤魔化す為かだ。彼等にこんなことを言ってきた。

「それでお酒ですが」

「ああ、飲み放題だからさ」

中田が笑顔で彼女に答える。

「好きなだけ飲んでいいからさ」

「ワインもでしょうか」

その飲み放題にワインもあるかどうかというのだ。

「それもあるでしょうか」

「ああ、ギリシアじゃ」

「はい、ワインです」

それが主に飲まれるというのである。実際にギリシアでは昔からワインがよく飲まれている。中田もそれは知っていてそれで言うのだった。

「それが一番よく飲まれます」

「だからだよな。勿論な」

「ワインもですね」

「好きなだけ飲めるよ」

「では。そうさせてもらいます」

「ワイン注文しようぜ」

中田は早速周りに言った。

「それでワインで乾杯しようぜ」

「ああ、それじゃあビールだけでなくな」

「ワインも頼んでな」

「そうして飲もうか」

こうした話をしてだった。彼等は早速ワインを頼んで飲むのだった。

無論聡美も飲む。その飲む量はかなりのものだった。

中田もワインをボトル単位で飲む彼女にだ。驚きを隠せずに声をかけた。

「飲むねえ」

「好きなので」

「それでそれだけ飲むんだ」

「はい」

その通りだとだ。聡美は答える。

「飲めます」

「そうか。それにしても飲むよな」

「そんなに飲んでますか？」

「あんたボトル三本目だよ」

聡美は自分からグラスに赤いワインを注ぎ込んで飲んでいる。既に二本空になっている。しかもさらにだ。三本目も空けているのだ。中田もワインを飲んでいる。だが彼はまだ一本目だ。それを飲みながら聡美に話すのだ。

「それでまだ飲むんだよな」

「五本は」

「俺四本が限度だけれどな」

「ワインお嫌いですか？」

「あまり酒は強くないんだよ」

中田がこう言うと思った。周りはすぐに顔を顰めさせてこう突っ込みを入れた。

「いや、ワイン四本って凄いだろ」

「ただ飲むのが遅いだけだな」

「やっぱり凄いだろ」

「立派な酒豪だぜ」

「そうか？自分ではそうは思わないけれどな」

中田は自覚のない調子で自分でグラスに酒を注ぎながら応える。

「そうか？」

「そつだよ。今も飲んでるしな」

「御前も大して変わらないよ」

「まあいいじゃないか。とにかく飲んでな」
そうしてだというのだ。

「楽しくやろうな」

「そうですね。ただ」

また彼に言う聡美だった。

「何があっても」

「何があっても？」

「気持ちを確かにされて」

それでだというのだ。

「今の様に」

「何かわからないけれど俺はいつもこうだよ」

中田は笑いながら聡美にも言葉を返す。

「変わらないさ」

「そうですか」

「ああ、じゃあ楽しくな」

こんな調子でだ。中田は酒を楽しんだ。これが聡美との出会いだった。そしてそれから数日後だ。彼の家族は旅行に出た。快適な一人暮らしがはじまる筈だった。

第零話 炎の覚醒その十五

しかしその彼のところにだ。不意にだ。携帯のメールで連絡が来たのだった。

「おい、マジかよ」

「あの、とにかくです」

「病院だよな」

「すぐに来て下さい」

こう連絡が来たのだった。

「ご家族が」

「何でこうなるんだよ」

携帯をすぐに切ってだ。彼は忌々しげに言った。

そしてそのうえでだ。部活に向かう途中でユーターンする。その彼に友人達が声をかける。

「おい、どうしたんだよ」

「何があつたんだよ」

「悪い、今日は無理だ」

こう彼等に返す。背を向けたうえで。

「明日はちゃんと来るからな」

「病院がどうとかって」

「まさか」

「何もないさ」

否定の言葉だった。否定になれない状況だとしても言ってしまった。

「別にな」

「そうか。それじゃあな」

「安心して行って来い」

「そうしろよ」

「ああ、わかった」

友人達の言葉を受けてだ。そのうえでだった。

彼は自分のバイク、ホンダワルキューレに乗りだ。そのうえでだ。病院にまで向かう。そこに飛び込むとだ。すぐにだった。

「中田直行さんですね」

「はい、そうです」

こうだ。入り口で待っていた医者に答える。連絡してきた人だと察した。

「俺がその中田です」

「そうですか。それでなのですが」

「親父は！？」

まずはだ。父から問うた。

「それでお袋は。美和子は」

「ちよつと待つて下さい」

明らかに我を失っている彼にだ。医者は穏やかに告げた。

「まずは中に入りましょう」

「病院の中に」

「はい、話はそれからです」

「わかりました」

中田も医者言葉に頷く。そうしてだった。

二人で病院の中に入った。その中は。

白く広い。受付もかなり多くの看護師が詰めている。その中を見てだ。

中田は少し落ち着きを取り戻してだ。その白い世界を見て医者に言った。

「それで、ですよ」

「はい、三階です」

「三階ですね」

「そこにおられますので」

落ち着きを取り戻した彼への言葉だ。

「では今から」

「わかりました。それじゃあ」

二人はエレベーターに乗りそこから三階に来た。それでだった。三階もまた白い世界だった。ただし廊下はクリーム色と言っている。

そのビニールの廊下を進みながらだ。医者に問うのだった。

「で、親父達は」

「何とかです」

「何とか!？」

「一命は取りとめました」

最悪の事態はなかったというのだ。

「幸いなことに」

「そうですね」

その言葉を聞いてだ。中田は安堵した。しかしその安堵した彼にだ。

医者はだ。さらに言ったのだった。

「ですが」

「ですが？」

「意識は戻られていません」

「三人共ですか？」

「はい」

医者は沈痛な顔で答える。その白髪を整えた眼鏡の顔が曇っている。

その曇った顔でだ。彼に話すのだった。

「意識不明です」

「じゃあまさか」

「脳は無事です」

脳死でもないというのだ。

第零話 炎の覚醒その十六

「そして内臓も損傷していますが」

「それでもですか」

「回復は可能です。また骨折や靱帯は損傷していても」

「身体も何とかですか」

「ですが。傷が深く」

そうしてだというのだ。

「意識は戻られていますか」

「ですか」

「御会いになれますか？」

そうした状況でもだ。そうするかというのだ。

「そうされますか？」

「御願います」

すぐにだ。答えた彼だった。

「そうさせて下さい」

「わかりました。それでは」

「それで部屋は」

三人が何処にいるか。話はそこに移った。

「何処ですか？」

「あの部屋です」

廊下を進む、やや駆け足で進みながらだ。医者は自分の横にいる

中田に対してすぐ前の右手に見える部屋を指し示して述べた。

「あそこです」

「あの部屋ですね」

「それでは」

「はい、それじゃあ」

こう話してだ。そのうえでだ。

中田は自分でその扉をすぐに開けてだ。部屋に入った。

部屋の中も白くカーテンもベッドも白だった。そしてそこにいる者達も。

三人はそれぞれのベッドの中にいた。その中でだ。酸素マスクを付けてだ。点滴を受けていた。頭には包帯が巻かれ目を閉じている。そのうえで一言も話さず横たわっているのだった。中田はその家族達を見てだ。自分の隣に来てくれた医者に尋ねた。その顔は家族を見ている。そうしながらの言葉だった。

「あの」

「はい」

「回復しますよね」

「それは」

医者の今度の返答はよいものではなかった。
沈んだ声でだ。彼に言うのである。

「どうも」

「無理なんですか!？」

「現状を維持するだけでも」

「維持するだけでも」

「かなりの費用が必要ですが」

「手術になると」

「億単位です」

それだけのだ。費用が必要だというのだ。

「それでも宜しいでしょうか」

「億って」

「それだけあれば。回復の為の手術を行えます」

「三人共そんなに酷いんですか」

「正直命が無事で後遺症も見られないだけ奇跡です」

医者は真剣な面持ちで話してきた。

「まさにです」

「そうなんですか」

「あの、それで」

「お金。三人分ですよ」

「はい、それで億単位です」

「それで何億ですか？」

医者に顔を向けてだ。今にも壊れてしまいそうな表情で問うた。

「何億必要なんですか？」

「三億でしょうか」

「三億ですか」

「やはりないですよね」

「とても」

その額を聞いて。予想していたが苦い顔になってだ。首をしきりに振りだ。そのうえで答える彼だった。

「ありません」

「維持費は」

「そっちはどうなるんですか？」

「これだけで。保険もあつて」

中田その維持費の話もするのだった。

「どうでしょうか」

「それ位なら何とかあります」

額と保険のことを聞いてだ。中田は安堵した。本当に最悪の事態はだった。

第零話 炎の覚醒その十七

しかしだ。これではとだ。そのこともわかって医者に答えた。

「ですが。手術費は」

「何となればいいのですが」

「医者もだ。心から願う口調だった。」

「ですがそれは」

「そうですね。とても」

「奇跡を願いましょう」

「最早だ。それしかないというのだ。」

「そうしましょう」

「そうですね」

中田は頂垂れるままに話を聞くだけだった。そのうえでだ。

絶望しきつて病院を後にする。そのままバイクに乗りだ。彼はあてもなく走った。

目的地も決めずだ。ただただ走った。彼は何かあるとそうして気分転換を図るのだ。しかし今はそうしてもだ。とてもだった。

心が晴れない。全くだ。それであてもなく走り続ける。

その中でだ。彼は呟くのだった。

「どうすればいいんだよ」

「家族のことをだ。呟くのだった。」

「本当によ。三億なんてよ」

「そのことをまた言うのだった。」

「稼ぐか？どうして稼ぐんだ？」

何もかもがわからなくなっていた。考えが堂々巡りになっていく。その堂々巡りの中バイクを進ませだ。夕刻から夜、そして真夜中になった。

真夜中にバイクを進ませ続ける。周りの車は殆んど見えない。灯りだけが闇の中に見える。その灯り達も今は目に入りはしなかった。

その闇の中を絶望の中に進んでいく。その彼の耳にだ。

不意にだ。何かか聞こえてきた。

『欲しいですか？』

「何だ？」

『欲しいですか？』

耳ではなく。頭の、いや心にだ。直接彼に言ってきた。

『それが』

「金がかよ」

中田はその心に直接尋ねてくる声に問い返した。

「金が欲しいかっていうんだな」

『どうなのですか？』

また問うてきた声だった。

『貴方は』

「欲しいさ」

まさにそうだとだ。彼は即答した。

「三億な」

『そうですか。欲しいのですね』

「けれどそんな金何処にあるんだ？」

そのことをだ。彼は声に言い返した。

「ないだろ。どうしようもないだろ」

『あります』

そうだとだ。声は言ってきた。ここでだ。中田はその声の質に気付いたのだった。

「あんた、女か」

『そうなります』

「そうか、女なんだな」

そのことにだ。今ようやく気付いたのだ。絶望しきっている心がだ。気付くことを遅らせてしまっていた。

「それなら直接話したいんだがな」

『残念ですがそれはできません』

「訳ありかい？そもそも何で姿を見せないんだい？しかも」
『しかも？』

「バイクで走ってる俺にこうして声をかけられる」

その有り得ないことからだ。中田は声に対して言った。

「あんた、何者だよ。若しかして」

何かというのだ。その声の主は。

「人間じゃねえだろ」

「それは」

「何だ？地縛霊とかそんなのか？」

半分冗談混じりにだ。声に言った。

「生憎そういうのはお断りだぜ」

「違います」

しかしだ。声はそうした存在ではないというのだ。

「私はそうした存在ではありません」

「悪霊じゃないのかよ」

「はい、そうではありません」

こう言うのだ。

第零話 炎の覚醒その十八

「それは約束します」

「じゅああんた何者なんだ？」

「確かに霊的な存在です」

「霊的ねえ。精霊か何かか」

「そう考えて頂いていいです」

「わかった。じゃあ精霊って考えてな」

「そのうえでだとか。声に言う彼だった。」

「あんたは俺に何か用なのかい？」

「貴方は今お金が欲しいですね」

「さっきも言っただと思うけれどな」

「必要ですね」

「三億な」

それだけの額が必要だということだ。声に話すのだった。

「それだけ必要なんだよ」

「わかりました。三億ですね」

「出せるかい？三億」

出せる訳がないと思いつながら声に問うた。

「それだけの金な。どうだい？」

「若しも貴方がです」

「俺が？」

「これから剣を手にして戦われるならです」

「何だ？殺してもしろっていつのかよ」

そう考えてだ。中田の顔が曇った。

ヘルメットの中の顔をそうさせてだ。声にこう返した。

「悪いけれどそうしたことにはな」

「いえ、殺人ではありません」

「何だよ、じゃあ何なんだよ」

「貴方が望まれるならです」
前置きを強調してだ。そうして言ってきた声だった。
「私は貴方に剣を授けます」
「それで戦えつていうんだな」
「魔獣達と戦い倒し」
「魔獣ねえ。話が洒落にならない方向に進んでるな」
「そして他の剣士達ともです」
「戦って勝てばだな」
「その都度お金が入ります」
「そこまで聞いてだ。中田は話をまとめてこう言った。
「成程ね。それで三億ね」
「どうされますか？」
「他の剣士つてのが気になるけれどな」
「それでもだとだ。中田は言った。
「魔獣を倒したら金が入るんだな」
「黄金としてですが」
「わかったぜ。じゃあ黄金、金貰うぜ」
「では。剣士になれますね」
「ああ、なるさ」
バイクを運転したまま声に答える。
「そうさせてもらうな」
「わかりました。それでは」
「で、剣だよ」
話が決まったところだ。中田は早速声に尋ねた。
「剣は何処だよ」
「剣ですか」
「契約成立だろ？じゃあ早速」
「はい、丁度いい具合にです」
「どうかとだ。声の具合が変わってきた。
「魔獣が来ました」

「何処だよ。何処に出て来たんだよ」

「前に」

「前？」

「はい、前から来ます」

声はこう言うのだ。実際にだ。

「貴方の前からです」

「前から……んっ!？」

目をこらすのだ。そこにだ。馬がいた。

しかし只の馬ではない。首がある筈の部分には人間の上半身がある。若い濃い髭の男がだ。首の場所に生えていたのだ。

その姿を見てだ。中田はすぐに言った。

「あれってよ」

「おわかりですね」

「ケンタウロスだよな」

「はい、ケンタウロスです」

「ギリシア神話に出て来るあれかよ」

その姿でわかった。すぐにだ。

第零話 炎の覚醒その十九

そのうえでだ。声に尋ねるのだった。

「あれと戦って勝てばいいんだな」

「黄金が手に入ります」

「わかった。黄金だな」

「では。戦われますね」

「三億の為にな。それでな」

「はい、それで」

「剣は何処だよ」

ここで尋ねたのはまたこのことだった。

「その剣つてのは何処にあるんだよ」

「念じて下さい」

「念じる!？」

「はい、念じて下さい」

こう彼に言うのだ。

「その手に剣があると」

「それでいいんだな」

「はい、そうすればです」

「剣が出てくるんだな」

「今度からそうして頂ければいいですから」

「今からではないとだ。こうも話す声だった。」

「ですから」

「ああ、わかったぜ」

中田もその言葉に頷く。そうしてだった。

バイクに乗りながらだ。両手をハンドルから放し。そうして。

両手に同じ大きさの日本刀を出した。刃のところにそれぞれ波がある。赤い唾と柄でだ。刀身も赤く輝く。そうした異様な刀だった。

その刀を見てか。声がこう言ってきた。

「その刀が貴方の刀ですか」

「何だ？おかしいか？」

「刀は。貴方がイメージされるものがそのままです」

「出て来るってのか」

「貴方は二本ですか」

「二刀流なんだよ、俺ってな」

笑顔でだ。こう返す中田だった。

「それが俺の剣道のスタイルなんだよ」

「そして力はそれですね」

「力？」

「剣士はただ剣で戦うだけではないのです」

「その力も使うつてのか」

「そうです。そして貴方の力は」

「赤いな。つてことは」

どうなのかだ。中田は自分で考えて話した。

「火か？」

「はい、炎です」

声もだ。それだと答えた。

「それが貴方の力になります」

「火ねえ。何か面白いな」

「面白いですか」

「この力であのケンタウロスと戦えばいいんだよな」

「その通りです」

「わかったぜ。じゃあな」

バイクを足だけで操りながらだ。そのうえでだ。

自分に向かい突き進むケンタウロスを見据える。魔獣は。

中田に向かいつつだ。その手にだ。

何かを出してきた。それは槍だった。

手槍をだ。中田に向かって投げてきたのだった。

「槍かよ」

「槍はどうされますか？」

「どうするかこうするかもしれないからな」

これが中田の答えだった。それでだ。

その左手の剣を一閃させて。そのうえで。

自分に向かつて飛んで来る槍を上から両断した。槍は真っ二つになり燃えて消えていった。その闇の中で燃えて消える槍を見てだ。

第零話 炎の覚醒その二十

中田はだ。こう声に言った。

「本当に燃えるんだな」

「炎の力です」

「本当に俺の力なんだな」

「剣と。その力を使ってです」

「戦ってそれでか」

「黄金を手に入れて下さい」

「わかったぜ。それじゃあまず」

ケンタウロスは今度は槍を構えてきた。それで彼を突き殺すつもりなのは明らかだった。その距離は最早至近にまで迫っていた。

槍も刀も互いに攻撃できる距離だった。それを見てだ。

中田は声に言うまでもなくだ。すぐに己の両手の刀を振った。

その動きは速い。まさに稲妻の如きだった。その速さでだ。

ケンタウロスを狙う。魔獣もだ、

その槍で突こうとする。忽ち打ち合いになる。

バイクも足も止まりだ。それぞれ何合も何合も重なる。その中でだ。

中田は右手の刀から突きを出した。それは。

ケンタウロスの喉を貫いた。それで終わりだった。

魔獣は動きを止め忽ちのうちに刀から出る炎に包まれた。燃えて消え去った。

そしてその消え去った後には何枚かの黄金の棒が残った。中田はそれを見て声に尋ねた。

「それでこれをだな」

「はい、そうです」

「売って。そうしていつて」

「お金にして下さい」

「少し回りくどいけれどもいいか」

中田はその手順はもう構わないとした。

「金が手に入るんだからな」

「それで三億ですよな」

「ついでに生活費もだな」

「生活費？」

「今気付いたんだよ。親父は会社員でお袋はパートに出てるんだよ」
今日の平均的な家庭であると言える。むしろいい方かも知れない。

「その二人も今入院してるんだよ」

「それでお金が必要ですから」

「俺の生活費はどうなるんだ？」

働いているその二人がいなければどうかというのだ。

「アルバイトをしてもいいけれどもな」

「ではそこでお金をですか」

「ああ、戦って手に入れるさ」

そうしてだ。生活費もだというのだ。

「そうすればいいよな」

「それじゃあですね」

「金つてのはとにかく必要だからな」

「では」

「その分も稼がせてもらうさ」

彼は言った。

「充分にな」

「そうされますか」

「ああ。それでな」

「はい。一体何でしょうか」

「こうして魔獣を倒していけば金が手に入るんだな」

「倒せば倒すだけです」

そうだとだ。声も答える。

「そうなります」

「そうか。話通りだな」

「そして剣士を倒せば」

「金もつと入るんだな」

「魔獣の比ではありません」

「そこまでだというのだ。」

「かなりのものになります。それにです」

「それに？」

「魔獣もそうですが」

「こつ前置きしてだった。中田に話すことは。」

「剣士を倒せばそれだけ貴方も強くなります」

「剣士の強さをそのまま取り込むってことか」

「そうです。魔獣についてもです」

「倒せば倒すだけ。強くなるのか」

「その通りです。剣士は特にそうしたものが大きいのです」

「強く、ねえ」

その強さという言葉にもだ。中田は反応を見せた。

第零話 炎の覚醒その二十一

そのうえでだ。彼はこんなことも言った。

「まあそれもいいな」

「強くなりたいですか」

「だってあれだろ？戦えばな」

「はい、戦えば」

「それでけ強くなつて」

そのうえでだというのだ。中田は強さだけを見てはいなかった。強くなりどうするか。中田が今声に対して言うのはこのことについてだった。

「より強い魔獣や剣士を倒せば余計にな」

「多くの黄金や糧を得られます」

「じゃあそれでいいさ」

笑顔で応えて言う中田だった。

「強くなつてみせるさ」

「そう仰いますか」

「ああ、この言葉は撤回しないぜ」

笑顔で言いだ。そのうえでだ。

中田は黄金を拾いだ。それ等を全て己の懐に入れた。そうしたうえで。声に対して再び尋ねた。

「今のところこれで終わりだよな」

「はい、終わりです」

その通りだと答える声だった。

「もう魔獣はいません」

「そうか。それじゃあな」

「休まれますか」

「家に帰ってな」

そのうえでだというのだ。

「そうさせてもらうぜ」

「わかりました。それでは」

こうしてだった。彼は剣士となったのだった。そうしてだ。

魔獣を倒していく。そして他の剣士達とだった。

「それでだよ」

「何でしょうか」

声は何時でも彼と共にいた。そうして彼の問いに答えるのだった。

「俺の他の剣士な」

「彼等ですね」

「そいつ等は出て来るんだよな」

「今もそれぞれです」

「魔獣と闘ってるんだな」

「貴方と同じです」

そのだ。中田とだというのだ。

「貴方を含めて十三人です」

「十三人！？俺も入れてか」

「はい、十三人です」

それだけだというのだ。

「その十三人の剣士達です」

「闘ってそれでか」

「最後の一人になれば」

「どうなるんだ？一人になれば」

「究極の力が手に入ります」

「究極のつて何だよ」

「勝てばわかります」

そうすればだというのだ。

「最後まで勝てば」

「何かわからないけれど俺はな」

彼はどうするか。それはもう決まっていることだった。

「三億の為にな」

「闘われますね」

「ああ、決めた」

そうだとだ。二本の刀を手にして言った。

「家族の為に闘うんだよ」

「わかりました。では頑張ってください」

「三億。一回の戦いで百万辺りでな」

「大体三百回ですね」

「洒落にならない位闘わないといけないか」

「ただ剣士一人で一億かと」

「それだけの黄金が入るというのだ。」

「それだけの黄金が入りますので」

「わかったぜ。一億だな」

「そうです。剣士同士の闘いはそれだけの価値があるものです」

「価値!？」

「・・・・・・」

価値という言葉についてはだ。声は急に沈黙したのだった。

中田もそれが気になったがだ。それでもだった。

言わないのなら聞かなかった。それが彼のやり方だった。

それでだ。こう声に言うのだった。

「とにかくな」

「はい、とにかくですね」

「戦って勝てばいいんだな」

あえて単純に言うてのことだった。

「そうすればいいんだな」

「そうです。頑張ってください」

「戦うしかないからな」

中田の表情は明るい。しかしだった。

その明るさに強い決意も含ませてだ。そのうえでだった。

「じゃあ。やらせてもらうぜ」

「はい、それじゃあ」

これが全てのはじまりだった。彼は戦いの中に入った。そしてそれはだ。彼の運命を大きく動かしていく。だが彼は今はそのことは知らなかった。

第零話 完

2
0
1
1・6・2
3

第一話 水の少年その一

久遠の神話

第一話 水の少年

八条学園高等部。その剣道部でだ。

道場の中で部員達だ。こんな話をしていた。

「何かだいがくにな」

「ああ、そうらしいな」

「何か凄く強い人いるってな」

「そうらしいな」

こうだ。彼等は休憩時間に落ち着いた顔で話をしていた。

「洒落にならない位強くてな」

「しかも二刀流で？」

「バケモノみたいに速いらしいな」

「そんなのいるからな」

こうした話をしていてだ。そこにだ。

一人の少年が来て言うのだった。

背は一七六程で伸ばしたスポーツ刈りの様な髪型をしている。目は優しい感じで二重のものだ。口は一文字でしっかりとしている。顔は全体的に四角い感じだがエラは張ってはいない。

その彼がだ。仲間達の話聞いて言ってきた。

「そんな人が大学にいるんだ」

「ああ、とにかく尋常な強さじゃないってさ」

「全国大会に出てもぶっちぎりの感じで」

「だからバケモノみたいだな」

「そんな強さだつてさ」

「ふうん、そんな人がいるんだ」

紺色の袴の上に防具を着けながらだ。彼は仲間達に伝える。

「一度見てみたいな。うちの学園だし」

「ああ、じゃあ今度行くか？」

「大学の方に入ってな」

「それで見てみるか」

「どんな人なのか」

「名前何ていうの？」

少年はその大学の剣豪の名前を尋ねた・

「何ていうのかな、それで」

「ええと、名前は？」

「名前は何ていったかな」

「ちよつと。わからないよな」

「だよな」

名前になるとだ。彼等は口のごもってしまふ。だがその中でだ。一人がだ。この名前を出してきた。

「そうそう、確か」

「確か？」

「その人の名前だよな」

「何ていうんだ、それで」

「上城大樹だったな」

この名前を出すのだった。

「そうだったよ」

「それ絶対違うから」

少年がすぐに突っ込みを入れた。

「だってそれって」

「ああ、わかったか」

「僕の名前じゃない」

こうだ。その名前を出した仲間にも口を尖らせて言うのである。その尖らせた様子がどうにも啄木鳥の様にも見える。特に横から見ると。

「だから絶対に違うよ」

「同姓同名とかさ」

「それでもいるかな」

「ひょっとしたらあるだろ」

その友人は笑顔で話していく。

「若しかしたらな」

「そんな筈ないから」

彼はその可能性を完全に否定する。

「全く。何を言うかって思ったら」

「まあ名前のことは置いておいてな」

彼はそのことは棚に上げてだ。それでまた言うのだった。

「その人のことは本当だからさ」

「大学にいる人が強いつてことだね」

「ああ、圧倒的だからな」

そこまでだというのだ。

「聞いた話によるとな」

「ううん、本当に一度見てみたいな」

彼、上城は仲間達の話聞いてまたこう言った。

第一話 水の少年その二

「どれだけ強いのかな」

「気とか使ったりしてな」

「竹刀から衝撃波出すとか」

「ゲームみたいな技出してな」

「そんなことできるかもな」

「そんな筈ないじゃない」

上城は流石にそれはないと笑って返した。

「幾ら何でも」

「だから冗談だよ」

「そんなのできる訳ねえだろ」

その彼にだ。周りは笑って話す。

「全く。上城ってな」

「そういうところが真面目なんだよな」

「冗談だったの」

そう言われてだ。彼は無然としながらも頷くのだった。

「それならそうと言ってくれたらいいのに」

「そんなのわからないか？」

「すぐにわかるだろ」

周囲はその彼に怪訝な顔になって言う。

「だから。御前はちよつとな」

「真面目過ぎるんだよ」

「真面目で駄目っていうのかな」

上城は今度はこう周りに問い返した。

「そう言うのかな」

「まあそれはさ」

「何ていうか」

「悪くはないさ」

「そう、特にな」

周りもだ。その彼にこう答えはした。

「ただな。一年のほら」

「斉宮みたいにな」

「冗談がちよつとわからないとな」

「しんどくないか？」

「別に。冗談がわからないかも知れないけれど」

だがそれでもだというのだ。

「特に困ったことはなかったし」

「じゃあ別にいいのか」

「そう言うんだな」

「うん、僕はそう思うけれど」

そのだ。彼自身はだというのだ。

「特にね。とにかく大学にだよな」

「ああ、その凄い人がな」

「いるからな」

「じゃあ。一度見てみたいな」

あらためてこう言う彼だった。

「一体どんな人なのか」

「そうだよな。本当にな」

「どんな凄い人なのか」

「見に行くか、今度な」

こうした話をしてだった。彼等は。

土曜日の部活の後で八条大学、高等部の隣にあるそのキャンパスに入りだ。そのうえで大学に剣道場に向かうのだった。

そこは高等部のものよりもさらに大きな道場だった。建てられてから随分と経っているらしく黒い瓦に年季が見られる。そしてだ。

白い壁にも古さが見られた。そのうえ。

中もだった。床も踏むと音がしそうだ。奇麗に掃除されているがそれでもだ。年季が見られるのは事実だった。

その年季のある道場の中にだ。彼がいた。

相手を片っ端から倒す二刀流の面の男、それでもうわかった。彼こそがだとだ。

「あの人だよな」

「ああ、間違いないな」

「あの人だな」

「二刀流の人あの人だけだしな」

それでだ。わかるというのだ。

その強さを見るとだ。これが。

「本当に強いな」

「どんな人でも適わないじゃないか」

「噂通りっていうか」

「噂以上だよな」

上城達は口々に話す。その彼を見て。

そしてそのうえで彼の垂れにある名前を見る。それは。

第一話 水の少年その三

「中田さんっていうんだ」

「ふうん、それがあの人の名前か」

「そうなんだな」

このことをはじめて知ったのだった。

「あの人がな」

「そうなんだな」

「噂の二刀流の人なんだな」

「中田さんね」

上城もだ。彼の名前を呟く。そのうえでその名と強さを心に刻む。これは無意識だがそうしてだ。蛍光灯、これだけは付け替えたのか新しいその灯りの中で照らされている彼の稽古を見てそうしたのだ。

そうしながらだ。彼はこう周りに話した。

「あの人ってさ」

「ああ、強いよな」

「本当に」

「バケモノみたいっていうか」

バケモノという言葉を訂正して。こう言うのだった。

「鬼みたいだね」

「それじゃあ意味同じじゃないのか？」

「バケモノと鬼だとな」

「似たようなものだろ」

「多分違うと思う」

だがだ。彼はこう友人達に話すのだった。

「それはね」

「じゃあ鬼か」

「あの人鬼か」

「そうなのか？」

「そんな感じがするけれど」

今も稽古を、しかも休みなくする彼を見ての言葉だ。

「僕の気のせいかな」

「そうじゃねえのか？」

「幾ら何でもそこまでいかないだろ」

「鬼っておい」

「しかも言い過ぎだろ」

「そうだね。悪いよね」

言ってからだ。そのことに気付いた彼だった。

そして申し訳なくだ。こう言うのだった。

「じゃあ。言わないから」

「っていうか鬼なあ」

「そんなだけ強いって意味だよな」

「そうだよな」

友人達は上城の言葉についてあらためて考えて述べもした。

「確かに桁外れの強さだよな」

「あんだけ強いと全国大会もいけるだろうな」

「前からあんなに強かったのか？」

その彼等も今見ているその圧倒的な強さ、まるで野獣の如き強さを見てだ。彼等もこう考えていった。

「っていうかあの強さそうそうすぐになるか？」

「戦い方も何かな」

「襲い掛かって切り捨てるみたいだな」

「そんなのだけれどな」

「すぐにああなるのかね」

「相当な修羅場積んでないか？」

一人がこんなことを言った。

「さもないとあそこまでなれないだろ」

「そうだよな。ちよつとやそつとじゃな」

「なれないよな」

「ああ、あいつね」

その彼等にだ。大学の剣道部員が言ってきたのだった。防具を着けたままだがそれでもだ。彼等に対してこう言うのだった。

「最近急にだよ」

「急になんですか」

「強くなっただんですか」

「そうなんですか」

「いや、前からかなり強かったよ」

それは事実だというのだ。

第一話 水の少年その四

「前から強いことは強かったんだよ」

「けれどそれでもなんですね」

「最近になってですか」

「滅茶苦茶強くなったんですか」

「そうだったんですか」

「そう。まあ性格はそのままだけれど」

性格はそのままだというのだ。だが強さは変わったというのだ。

中田は今もだった。一気に前に出てだ。

屈み相手の胴を切り抜いたのだった。

それで一本だった。その一本を見てだ。

上城は唸る様にして言った。

「速いし凄い威力だね」

「切り抜いたって感じだけれど」

「真剣だったら真つ二つだよな」

「そんな勢いだよな、あの銅は」

「普通の剣道じゃないだろ」

「そう思うだろ」

実際にそうだろうとだ。大学の部員も話す。

「今あいつと戦えるのはな」

「いないですか？」

「大学にも」

「いないね」

まさにだ。そうだというのだ。

「あれだけの強さの人間は」

「けれど何か」

どうかとだ。上城が言った。

「餓えてるみたいですね」

「餓えてる？」

「そんな感じがします」

こうその大学生に話すのだった。

「僕の気のせいでしょうか」

「餓えてるね。そういえばそうかな」

「やっぱりそう思いますか？」

「言われてみればね」

彼にしてもそれで気付いたというのである。

「そんな感じだね。今までは素早いだけだったけれどがむしやらになって」

「そのがむしやらな闘い方がですか」

「どうしてああなったのか気になるね」

大学生にしてもだ。そうだというのだ。

「俺達にしても」

「そうですか。やっぱり」

「うん。本当に急にああなったんだよ」

強くなったというのだ。獣めいた強さにだ。

「ただ。あれで性格は」

「前と同じですか」

「うん、同じだよ」

そうだというのだ。とにかく性格は変わらないというのだ。

「あれで明るくて飄々とした奴でさ」

「明るいですか」

「うん、明るくていい奴だよ」

中田のその性格についても話されていく。性格的にはそうした人間だというのだ。ただ変わったのは剣道の強さだというのである。

「ああした闘い方だけれどね」

「防具着けたら性格変わる？」

「そういう人もいるよな」

「ああ、いるいる」

「中には屑になる奴もいるしな」

高校生達はここでこんな話をする。残念なことに剣道をしているからといって人間性までよくなるとは決して言えないのだ。中には、とりわけ学校の教師が剣道をする場合は精神の鍛錬が伴っていない輩が多い。教師にそうした輩が多いのは日教組の問題であろうか。

「世の中色々な奴いるからな」

「屑も多いよな」

「剣道する資格がないようなな」

「そんな奴が」

「ああ、この前そっいつの来たよ」

ここで大学生がまた彼等に話す。

「中学生の子供達がここに来たんだよ」

「見学ですか？」

「それでなんですか？」

「いや、稽古で」

それで来たというのである。

「それはよかつたんだけれどね」

「問題があつたんですか」

「多分。その引率の教師に」

「ああ、大学生相手だし初心者の子もいたけれど」

それでもだというのだ。

第一話 水の少年その五

「俺達の目の前でその子が動きが悪いつて言ってひっぱたいたんだよ」

「えっ、動きが悪いつてだけでなんですか」

「生徒をひっぱたいたんですか？」

「それってちよっと」

「しかも膝で蹴ったりして」

尚且つだった。暴力をさらに振るつたというのだ。

「俺達も見てびっくりしたよ」

「いや、普通そんな教師いないでしょ」

「その教師頭おかしいですよ」

「流石学校の教師ですね」

一人がこんなことを言う。彼にとっては学校の教師という人種は問題を起こすものらしい。残念だがその割合が多いかも知れない。

「そんなことするなんて」

「っていうか無茶でしょ」

「そう。しかも合同稽古で中学生、自分が教えている生徒にね」

「その生徒に？」

「今度は何したんですか」

「突きを入れてたんだよ」

それを聞いてだ。上城達は啞然となった。何故ならだ。

「あの、中学生に突きって」

「まだ身体のできてない子にですか？」

「それって滅茶苦茶危ないですよ」

「っていうかそれ常識なんじゃ」

柔道の締め技等もそうだが何故剣道で中学生に突きが禁止されているのか。まだ身体が出来上がっていない相手にそれはあまりにも危険だからだ。

しかしその教師はだ。平然としてそうしたというのだ。

「そんな常識ないのが教師ですか」

「まあ。教師らしいっていえばらしいですけど」

「それはかなり」

「酷いんじゃない」

「そう、しかもシャベル突きっていつてね」

突きの問題はまだ続いていた。今度は。

「下から上に思い切り突き上げる技があるんだけれど」

「そんな技試合で使ったら反則ですよ」

「即刻退場ですよ」

「教師が生徒に使う技じゃなくてそれって」

「リンチ技ですよ」

「そう、それも使ってた」

そうした外道と言ってもいい技をだ。生徒に平然として使ったというのだ。

「俺達にも使ったけれど」

「稽古でそんな技使ってた」

「その教師って何なんですか？」

「ヤクザじゃないですね」

「今時ヤクザでもないだろうね」

大学生も顔を顰めさせて言う。

「そんなことはね」

「そんな教師がここに来てですか」

「稽古してたんですか」

「あんまり酷いんで俺達も怒って」

それでだ。大学生は話を進めてきた。

「言おうとしたらね」

ここで親指でだ。大学生から見えて背中にいる中田を指し示す。上城達に話している為彼に対して背中を向ける形になっているのだ。そのうえでだ。こう彼等に話すのだった。

「あいつが出て来てね」

「それでどうしたんですか？」

「まさかその教師を」

「そう、叩きのめしたんだ」

そうしたというのだ。その異常な教師をだ。

「もうね。完膚なきまでね」

「何か格好いいですね、それって」

「悪者を成敗した感じで」

「うん、中学生の子供達も喜んでいたよ」

つまりそれだけその教師は生徒達に評判が悪く人望がなかったというのだ。人は圧倒的な暴力の前には無抵抗になる。しかしだからといって反抗の気持ちは完全に抑えられないものだ。それは何時か何らかの形で刃となりその暴力を振るう者を八つ裂きにするものだ。

「よくやってくれたって感じだね」

「その教師まんま悪役ですね」

「ドラマに出て来る屑みたいですね」

「剣道四段って言ってたけれど」

段がそれでもだというのだ。

第一話 水の少年その六

「あいつの方が圧倒的に強かったし。そもそも心の鍛錬はできていなかったから」

「つまり段で強さって決まらないんですね」

「そうですね」

「あいつは八段以上の実力があるね」

中田を見て話すのだった。

「今はね」

「八段以上って」

「洒落にならない強さですよ」

「そこまでの実力って」

「うん。とにかく強いから」

また上城達に話すのだった。

「あいつとは稽古をしてもね」

「いいんですね」

「そうしても」

「するといいよ。高等部の先生はできた人だし」

少なくともだ。その中学の教師とは全く違うというのだ。

「こっちからも話をしようか？」

「あつ、じゃあ御願います」

「そうしてくれるんなら」

彼等にしてもだ。その話は願ってもないことだった。強い相手と稽古ができるということは。それだけ得られるものが多いからだ。それでだ。上城も言うのだった。

「じゃあ中田さんとも」

「ああ、じゃあ稽古してくれよ」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

他の面々も頷きだ。こうしてだった。

上城達は中田の稽古を見てだ。その帰りにだ。

上城の前にだ。肥満したパーマの男が出て来た。

鋭いというよりか剣呑な目をしており荒んだ表情をしている。肌は黒く顔も膨れている。みすばらしい服に右手には竹刀を持っている。

その彼がだ。上城に対して言うのである。

「おい、その御前」

「僕ですか？」

「そうだよ。御前だよ」

まるで因縁をつかるかの様な口調である。

「御前何でここにいるんだ」

「何でって通学路だからですけど」

「通学路だからいるのか」

「はい、そうです」

その通りだと答える彼だった。

「それが何か」

「御前、剣道やってるな」

彼が背負っている竹刀袋を見ての言葉だった。

「そつだな」

「ええ、まあ」

「何段だ」

「二段です」

「俺は四段だ」

男は自分から言ってきた。己の段をだ。

「俺は強いんだ」

「四段でしたらやっぱり」

「何でその俺が負けたんだ」

見れば表情がおかしい。どうやら酔っているらしい。言葉にもろれつが回っていない。その彼が言うのである。

「あんな若僧に」

「あの、どうされたんですか？」

「俺は偉いんだぞ」

男は今度はこんなことを言ってきた。

「先生様だ。先生様なんだぞ」

「学校の先生なんですね」

「ああ、そうだ」

その通りだとだ。ふらつく足で名乗るのである。

「そうなんだよ」

「そうですか。先生なんですか」

「糞っ、何で俺をクビにしたんだ」

問われてもいないのにだ。こんなことも言う男だった。

「教育委員会の連中はよ」

「クビって」

「生徒を殴って何が悪い」

どうやら暴力肯定主義者の様だ。その喋り方からわかる。

「駄目な生徒を殴って何が悪い」

「あの、それは」

「五月蠅い。反論するな」

酔った血走った目での言葉だった。

第一話 水の少年その七

「御前なんかかな」

「けれど暴力は」

「教師はな、偉いんだぞ」

まだこんなことを言う男だった。

「その俺が何してもいいだろうが」

「だから暴力を振るわれたんですか？」

「そうだよ。悪いかよ」

男は言いながらだ。上城に近付いてくる。それを見てだ。

上城は身の危険を感じた。それで身構える。

しかしここでだ。彼の後ろからだ。

声がしてきたのだった。その声は。

「おいおい、今度は通り魔かい？それとも絡んでるのかい？」

「手前は」

「あんた、本当に屑だね」

その大学の剣道部で圧倒的な強さを見せていた。男がだ。上城の後ろから出て来たのだ。上城は彼の姿を見て教えてもらった名前を口にした。

「確か」

「ああ、中田っていうんだ」

彼の方から名乗ってきた。

「有名人みたいだから覚えてくれよ」

「はあ」

「で、あんたは下がっておいてくれ」

こう上城に言うのである。

「ここは俺がやるからな」

「貴方がですか」

「この太ったおっさんはな」

その目の前の濁った男を指差して言うのである。

「人間の屑なんだよ」

「人間の屑って」

「社会に不要なダニとも言おうか？」

中田は男を見ながら言うのだった。

「部活で聞いてただろ。ほら、あの」

「あの生徒に暴力を振るってたっていう」

「その暴力教師だよ。元な」

「元ってつまりは」

「俺に叩きのめされてそれでな」

それでだというのだ。さらにだ。

「今までの悪事がばれて懲戒免職になったんだよ」

「そういう人なんですね」

「で、今は落ちぶれてな」

「こんな風になってるんですか」

「まあよくいる社会不適格者さ」

学校の教師には多い。悲しいことに。

「そういう奴なんだよ」

「そうなんですか」

「ああ。それでな」

それでだとだ。中田は上城にあらためて話す。

「多分八つ当たりで誰彼なく殴りに出てたんだな」

「誰彼なくって」

「その竹刀が何よりの証拠さ」

そのだ。竹刀がだというのだ。

「この屑にとつちや竹刀ってのは人を殴る為のものでしかないんだよ」

「それって」

それを聞いてだ。上城もだ。

眉を顰めさせてだ。こう言うのだった。

「間違ってますよ」

「あんたはそれがわかってるんだな」

「剣道は己を律するものですから」

その真面目な考えをだ。彼は中田にも話した。

「そんなの間違ってますよ」

「そうだよ。それはな」

「はい、剣道をする資格がありません」

毅然としてだ。上城は言い切った。

「人間として最低です」

「というか最低って言葉もまだ甘いけれどな」

「そこまで酷い人なんですか」

「だから俺も叩きのめしたんだよ」

その元教師を見据えながらの言葉だった。

第一話 水の少年その八

「あんまり酷いからな」

「その御前のせいだ」

怒った声でだ。彼は言うのであった。

「御前のせいで俺はクビになったんだよ」

「俺のせいでかい？」

「そうだよ。御前のせいだ」

完全にだ。他人のせいにする言葉だった。

「御前が俺のことを教育委員会にちくったんだな」

「全部調べてそのこと警察にも通報してやったぜ」

「だからだ。俺は生徒の親から刑事告訴も受けてるんだ」

「ああ、じゃあ近く刑務所だな」

「PTAにも叩かれてクビにもなって」

「で、臭い飯か。栄転だな」

「全部御前のせいだ。御前のせいでこうなったんだ」

まだ言う元教師だった。中田に対して喚きたてる。

「俺の人生どうするんだ。どうしてくれるんだ」

「その台詞あんたの生徒達に言うんだな」

中田はあえて冷たくだ。元教師に言うのだった。

「あんたに虐待されていた生徒達にね」

「あいつ等が何だっというんだ」

「あんたの生徒だろう？」

「生徒は俺の為にあるんだ。俺が部活を強くしてだ」

それでだ。完全にエゴで言う。

「それで俺が評価を高めて偉くなる為に必要なんだよ」

「あの、それは」

上城もだ。傍で聞いていた。

呆れてだ。その元教師に言うのだった。

「あんまりじゃないんですか？」
「何が言いたいんだ」
「生徒を育てるのが教師ですよ」
その常識から元教師に問うた。怪訝な顔で。
「偉くなるために利用するって」
「生徒なんてな。教師の為にあるんだよ」
まだ言うのだった。
「あいつ等を強くさせたら俺の評価があがるんだよ」
「だからそれは」
「五月蠅い！俺の生徒だ！」
まだ言うのであった。
「俺が何しようと思手だろ！」
「貴方という人は！」
「はい、ストップな」
激昂する上城にだ。中田が言ってきた。
「これ以上話しても無駄だよ」
「無駄って」
「世の中こう言う奴もいるんだよ」
笑いながらもだ。元教師を見据えての言葉だった。
「どうしようもない屑がな」
「けれど。これじゃあ」
「どっちみちこいつは破滅さ」
懲戒免職、そして刑事告訴だ。そうなるのは明らかだった。
こう言っただ。中田は。
元教師にだ。こうも言った。
「あんた、もう消えろ」
「何っ!？」
「大人しく裁判を受けて臭い飯食ってろ」
これが元教師への言葉だった。
「それが一番助かる道だ」

「俺が刑務所に入るっていうのかよ」

「そうだよ、刑事告訴されて検察が受理してな」
しかもだった。さらにだ。

「証拠も次から次に出てるんだ。それで刑務所に入らない筈ないだろ」

「俺は教師だぞ」

「元な」

「何で教育で捕まるんだよ」

「まともな教育者が刑事告訴なんかされるか」

中田は醒めた調子で元教師に告げる。

「そうじゃないのかよ」

「御前まだ言うのか」

「何度も言っさ。さっさと刑務所に入れ」

中田の言葉は変わらない。

第一話 水の少年その九

「それで罪を償え」

「元はといえば御前のせいだ」

元教師は中田に竹刀を突きつけてきた。間合いはかなり離れてい
るがそれでもだ。

「御前が俺を任せて通報したからな」

「犯罪者を通報するのは市民の義務なんだけれどな」

「だから俺は教師だ。あれは教育だ」

「まだ言うのかね。誰もそうは思わなかっただろ」

どういった通報か。中田はそのことも話した。

「俺と一緒に部員も顧問の先生も全員通報したよな」

「うつ・・・・・・」

「その悪い頭でもいい加減に理解しろよ」

今度はこんなことを言う中田だった。

「あんたもう終わりなんだよ。終わりは綺麗にしるよ」

「くつ・・・・・・」

「わかつたら消えろ」

最後通告だった。

「それで二度と人前に入るな」

「まだ言うのか」

「もう言いたくないな。あんたの汚い顔は見たくないからな」

「俺をまだ侮辱するのか」

「侮辱じゃなく事実を言ってるんだよ」

それだというのだ。

「わかつたな。じゃあ消えろ」

「手前！」

元教師は彼の言葉に激昂してだ。竹刀で襲い掛かった。それを見
てだ。

中田は両手に何かを出した。それで。

一気に踏み込んでだ。一瞬のうちに無数の攻撃を打ち込んだ。それが終わり元教師の後ろに出てだ。言っのだった。

「馬鹿は死んでも治らないんだな」

「うっ、俺がまた」

「あのな、剣道つてのは暴力じゃないんだよ」

その両手のものを何処かにしまっってからだ。己の後ろにいる教師を横目で見て言った。

「剣を使っんだよ。そういうものなんだよ」

「まだ言っのか」

「あんた、両手両足の腱も靱帯も切っておいたからな」
それでだというのだ。

「それも強くな。完治しても一生竹刀も握れないし生徒を殴ることも蹴ることもできないからな」

「糞っ、じゃあ俺は」

「もう何の力もない。只の下種豚だよ」

そうした無様な存在に過ぎないというのだ。

「まあ。諦めて罪を償っんだな」

「くっ……」

「今日のことも警察に通報するからな」

中田はこのことを言っのも忘れない。

「精々罪を償ってくれよ」

「おのれ……」

こうしてだった。元教師は無様に崩れ落ちてだ。この話は終わった。

上城はそこまで見てだ。中田に尋ねたのだった。

「あの」

「ああ、こいつはもう完全に終わりだからな」

その暴力教師じゃなくて」

彼のことはなかった。もうそんなつまらない人間はどうでもい

いというのだ。

代わりに中田にだ。こう尋ねたのである。

「今さっきですけれど」

「さっき？」

「何使われたんですか？」

戸惑う顔で中田に尋ねるのだった。

「両手に持たれていましたけれど」

「ああ、あれな」

「はい、何だったんですか？」

「これだよ」

笑ってだ。出てきたのは。

二振りの日本刀だった。どちらも同じ大きさだ。

その赤く輝く刀を見せてだ。上城に話すのである。

「これな」

「何時の間に」

「背中に背負ってるんだよ」

これは誤魔化しの言葉だ。しかしそれでも上城は今の言葉は信じた。話があまり急なので細かいところまで考えが及ばなかったのだ。

第一話 水の少年その十

「そうしてるんだよ」

「刀ですか」

「許可も得てるさ」

これは嘘だが。やはり上城は気付かない。

「ちゃんとな」

「だったらいいんですけれど」

「ついでに言えばミネ打ちだからな」

「死ぬとかもないんですね」

「斬ったら流石にやばいだろ」

笑ってそれはないというのだ。

「殺したらな」

「それはそうですね」

「だからそれはしないさ」

「再起不能にしたらだけなんです」

「そういうことだ。まあ手を出してきたのは向こうだ」

「ですね。それは」

誰がどう見てもだた。それは。

「この人が先に」

「それならいいさ。一件落着だ」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「中田さんでしたよね」

上城は彼のその名を確めたのだ。

「そうですね」

「ああ、そうだけれどな」

「お話は聞いてましたけれど」

「何だ？俺がもてるってか？」

「いえ、そうした話は聞いたことないです」
上城は素直だ。だからこう答えたのだった。
「強いつてことです」
「ああ、そのことか」
「本当に。こんなでかい人を倒すなんて」
「こいつの強さは薄っぺらいからな」
「薄っぺらい？」
「ああ、弱い者いじめの為の力だからな」
「それでだ。薄っぺらいというのである。」
「そんな奴の強さはな」
「薄っぺらいんですか」
「力つてのはそういうのに使っんじゃないんだよ」
「じゃあ何の為に」
「目的の為だよ」
その為だとだ。中田は上城に話す。
「目的の為にあって使うものなんだよ」
「目的？」
「ああ、目的だよ」
また上城に言う彼だった。
「それぞれの目的の為にな」
「あの、それって」
「ああ、わからないならいいさ」
中田は上城の疑問の言葉には笑って返した。
「それならな。あんたは関係ないしな」
「関係ないって」
「そうさ。関係ないからな」
屈託のない笑顔でだ。中田は上城に言うのである。
「俺の話さ」
「中田さんの」
「さて、じゃあ俺はこれだな」

「帰られるんですね」

「俺の家にな。帰って飲むつもりさ」

「お酒ですね」

「酒好きなんだよ」

笑顔でだ。彼は酒の話もした。

「酒なら何でもいけるぜ」

「お酒なら僕も」

上城も飲んだりする。好きな方だ。

「飲みますけれど」

「じゃあ今度一緒に飲むか？」

中田は気さくな調子で上城を誘いもした。

「いい店知ってるぜ」

「あそこですか？スタープラチナ」

「あのカラオケ店だな」

「それか白鯨か」

上城はこの店の名前も出した。彼等が今いる八条町にある居酒屋だ。スタープラチナと同じビルにあり同じ家が経営している店なのだ。

第一話 水の少年その十一

そこでだ。どうかというのだ。

「そこはどうですか？」

「ああ、どっちも行くぜ」

「やっぱりそうなんですか」

「まあ。機会があればな」

一度飲むというのだ。

「そうしような」

「ええ、機会があれば」

「ただ。今はな」

今はどうするかというと。それは。

「一人で飲みたい気分だからな」

「それでなんですね」

「ああ、これでお別れだよ」

そうだと行ってだ。そうして。

中田は上城に背を向けてだ。最後に言った。

「じゃあな」

「はい、さようなら」

「またな」

こう挨拶をしてだ。それでだった。

彼等は別れた。中田は夜の道の中に消え上城も自分の家に戻った。

家に帰るとだ。すぐにだった。

彼の母親、小柄でまだ若さの残る顔立ちの彼女がだ。彼にこう言ってきたのだ。

「あれ、今日は遅かったわね」

「ちよっと人とお話してたんだ」

「人って？」

「大学の人と」

中田のことをだ。ありのまま話すのだった。

「少しね」

「それで遅かったの」

「うん、僕と一緒に剣道をしてる人で」

母にこのことも話す。話をしながら制服姿でテーブルに座る。だがそこにはまだ料理は来ていない。母が冷蔵庫から出そうとしていくところだった。

それを見ながらだ。彼は話すのだった。

「凄く強い人だったんだ」

「そんなに？」

「うん、もう鬼みたいだね」

そこまでだと。母には鬼だと話す。

「滅茶苦茶強いんだ」

「鬼なの」

「そう、鬼」

こう話すのである。

「とんでもない位にね」

「じゃああんたよりもね」

「僕なんか全然だよ」

「比べ物にならないの」

「そう、あんなに強い人いないかもね」

ここまで言うのだった。

「いや、本当に」

「じゃああんたはね」

「僕は？」

「その人みたいになりたいのね」

母は微笑んで我が子にこう尋ねた。

「そう思ってるのね」

「そうだね。言われてみればね」

「そうよね。だから言うのよね」

「あんな強い人になれるかな」

「なれるでしょ。努力すれば」

「努力すればだね」

「そう、なれるわよ」

また我が子に言う母だった。

「けれどあんたも」

「僕も？」

「二段だし。段位の話じゃないけれど」

「強いっていうんだね」

「高校生では強い方でしょ」

剣道部ではレギュラーだ。八条学園高等部の剣道部は県内有数の強豪でもある。従って彼の強さもかなりのものなのである。

だが、だ。上城はこう母に言うのであった。

「僕なんかとてもだよ」

「そんなに凄いの」

「僕は高校生でその人は大学生で」

年齢のことも話すのだった。学生の頃はその強さに年齢が大きく関係する。熟練だけでなく体格や運動能力の違いが出てである。

第一話 水の少年その十二

「それにその人の強さはね」

「鬼なのね」

「本当に八段の強さはあるね」

あの元教師を一瞬で成敗したことを見てだ。それで話すのだった。

「そこまでね」

「八段？大学生で？」

「それだけの強さはあるね」

「そうなの。じゃあ全国クラスね」

「それ超えてるんじゃないかな」

全国クラスどころではない。それまでの強さだと母に話す。

「鬼だから」

「鬼ね、ここでも」

「そう、鬼神だから」

そうだとも話す彼だった。その話を聞きながらだ。

母はだ。我が子に優しい声でこう言ってきた。

「それじゃあね」

「それじゃあ？」

「食べなさい」

今度言うのはこのことだった。

「いいわね」

「ああ、晩御飯ね」

「まず食べることよ」

「強くなるにはだよね」

「食べないと死ぬのよ」

話がかなり根本的なものになる。生きているからには食べなければ死んでしまう。母が言うのはそのことからなのであった。

「そして栄養のものを食べると」

「その分身体がよくなつて」

「強くなるから。いいわね」

「うん、そうだね」

その通りだとだ、上城も頷く。そうしてだった。

実際に食べはじめる。その中でだ。

「ところでさ」

「どうしたの？」

「今日の御飯何でこれなの？」

「麦飯だから？」

「そう。何で麦飯なのかな」

見ればだった。上城がお碗に入れている御飯の中には麦も入っていた。彼はそれを食べながらだ。母にそのことを尋ねたのである。

「それ聞きたいけれど」

「ああ、それね」

「何で麦飯なのかな」

「長芋あるから」

だからだというのだ。

「それをかけて食べるから麦飯にしたのよ」

「ああ、お芋あるんだ」

「すったけれど食べる？」

「卵？味噌？どっち？」

「御味噌よ」

それで長芋に味をつけたというのだ。

「それ食べるわよね」

「うん、じゃあ」

すぐにだ。彼も頷いて言う。

「それ貰うよ」

「じゃあね。冷蔵庫にあるから」

「あるなら早く言つてよ」

「御免なさい、忘れてたのよ」

「全く。ところで父さんは？」

「自分の部屋でゲームしてるわ」

自分にとって夫にあたるその彼はそうしているというのだ。

「ドラゴンクエストしてるわよ」

「ああ、あれね」

「今シナリオ4だったわね」

それだというのだ。

「それやってるわ」

「お父さん4好きだよね」

「何だかんだであれが一番みたいよ」

「それでファイナルファンタジーは6で」

そのゲームはそれだというのだ。

「随分やり込んでるね」

「それでお母さんはね」

母はどうかとだ。我が子に笑顔で話す。

第一話 水の少年その十三

「ウィザードリイだけれど」

「あれねえ」

「外伝の4やってるのよ」

「ああ、あの最後の方の敵がとんでもなく強いあれだね」

「そんな話をしてだった。彼はその夕食を食べてだ。」

「そのうえでだ。彼は今度はだ。庭に出ようとした。」

「じゃあちよつとね」

「素振りするの」

「うん、そうするけれど」

「ちよつと待ちなさい」

「ここだ。母は彼を呼び止めるのだった。」

「今は駄目よ」

「駄目って？」

「食べてすぐじゃない」

「だからだというのである。」

「だからね」

「ああ、少し休めってことだね」

「そういうこと。簡単な運動でもね」

「食べてすぐは駄目なんだね」

「身体によくないから」

「こう我が子に話すのである。」

「まあ少し休んでいなさい」

「わかったよ。じゃあね」

「こつ言つてだ。彼は自分の部屋に入るのだった。そしてだ。」

「部屋で少し勉強してからだ。それから庭で素振りをした。」

「その次の日だ。新聞にはだ。」

「一人の元教師が逮捕されたとの記事があつた。それを見てだ。」

上城は両親にだ。こんなことを言った。

「学校の先生ってさ」

「学校の先生がどうしたの？」

「それで」

両親も彼と共に朝食を食べている。白い御飯に納豆をかけて食べる。それと葱の味噌汁に玉子焼きだ。そうしたものを食べながらだ。

彼はだ。両親に話すのだった。

「結構おかしな人がいるんだね」

「そうかしら」

「別にそうは思わないけれどな」

父の顔は我が子によく似ている。むしろ息子が父親似だった。

その父がだ。納豆飯を食べながら我が子に応える。

「そういう人もいるっていうことだろ」

「それだけかな」

「世の中おかしな人は絶対にいるからな」

父こつも話す。

「だから学校の先生にもな」

「いるんだ」

「ああ、そうしたおかしな人がな」

「それだけかな」

「ただしな」

「ここだ。父の口調が変わった。」

「学校の先生ってのはストレスが溜まるしな」

「大変な仕事だからね」

母も言う。味噌汁をすすりながら。

「授業のことに生徒のことに学校のこと」

「生徒の親もいるからな」

「考えるべきことは多い。それでなのだった。」

「何かってあるからな」

「だから。ストレス溜まってね」

「おかしくなるのかな」

「そういう人は多くなるな」

父はこう息子に話す。

「あと。日教組って組織もあって」

「ああ、あれね」

「あの組織の系列の先生は元々おかしいな」

このことは最近まで広くは知られていなかった。日教組がどういった異常な組織かをだ。ネットが普及するまで知られていなかったんだあ。

「あそこはな」

「あの組織はね」

母も日教組について話す。

「日本で一番変な組織だから」

「そんなにおかしいの？」

「だって。教育の理想がね」

どうなのかとだ。我が子に話すのだった。

第一話 水の少年その十四

「北朝鮮なのよ」

「北朝鮮ってあの」

「そう、あの国」

言わずと知れた究極の独裁国家だ。共産主義というのが世襲でありしかも一人の人間だけが贅を極めている。そうした国であるのも最近まで広く知られていなかった。

「あの国の教育があそこの理想なのよ」

「北朝鮮が理想って」

「おかしくない筈がないでしょ」

母は少し忌々しげに言う。

「それはわかるわよね」

「僕でもね」

こう返す上城だった。

「あの国がおかしいのはね」

「そのおかしい国をだ」

父は顔を顰めさせて我が子に話す。

「理想としていたからな」

「じゃあおかしいに決まってるんだね」

「全員がそうじゃない」

父もそれは確かと言う。

「しかしだ。それでもな」

「学校の先生にはおかしい人が多いんだね」

「日教組があるとな」

どうしてもだ。そうなるというのだ。

「そうなる」

「じゃあこの先生も」

その記事を見てだ。また言う彼だった。

「そういう人なんだね」

「あれ？ひよつとして」

母がまた話に加わってきた。

「何か暴力教師が通り魔やろうとして逮捕されたって」

「うん、それ」

まさにそれだと答える。母に対して。

「本当にその人だから」

「何か中学校の先生だったわよね」

「知ってるんだ」

「夜のニュースで見たらから」

それで知ったというのだ。その元教師のことを。

「酷い先生もいるものだってね」

「うん、本当にね」

上城は自分がその教師に会ったことはあえて隠して応える。

「それはね」

「生徒に普通に暴力振るって一切お咎めなしだったなんて」

「通報されるまではそうだったみたいだよ」

「それ自体がおかしいわよ」

母は自分のテーブルのところで首を捻る。

「そう思うと。あんたの通ってる学校は」

「小学校から。そんなことはなかったから」

「幸せだったわよね」

「というかそんな先生がいること自体が」

「信じられないの？」

「普通の社会でそうした人って存在できるの？」

こう両親に問うとだ。その答えは。

「そんな筈ないだろ」

「絶対に問題になるわよ」

こうだった。当然の答えだった。

「そんな人間普通にクビだぞ」

「警察来ない筈がないから」

「そうだよ。幾ら何でもね」

「それで問題にならない方がおかしい」

「それまで問題にならなかったのがね」

これが普通の社会である。教師の世界の方がおかしいのだ。

それでだった。二人はまた我が子に話した。

「いいか、そういう人間には絶対にな」

「なったら駄目よ」

「そうした人間は教師じゃない、反面教師だ」

「真似をしたらいけない人だから」

「そうなんだね。普通の世界じゃ」

どうしてもそうなることだった。そんな話をしてだ。

第一話 水の少年その十五

上城は朝食を食べ終えて。それからだった。

「じゃあ。今からね」

「歯は磨いていきなさいよ」

「うん、わかってるよ」

こう母に応えながら席を立ち食器を洗い場に置いてだった。
そのうえで歯を磨きに行きだった。

「今からね」

「行つてらっしゃい」

「車に気をつけてな」

両親がこう言つて我が子を送る。そしてだ。

母は夫である相手にもだ。こう告げた。

「あなたもね」

「おっと、そうだな」

「そうよ。食べて歯を磨いてね」

「それで会社に行かないとな」

「そう。それからね」

「歯は磨かないとな」

「そう、まずは歯が大事よ」

健康管理はそこからだというのだ。

「だからね」

「食べたなら絶対に歯を磨くのか」

「食べた後が一番汚いから」

それを磨いて。それからだというのだ。

「お口の中は綺麗にしないとね」

「そうだな。けれどな」

「けれど？」

「磨き過ぎても駄目だからな」

それもだとだ。彼は自分の妻に笑いながら話した。

「そこも気をつけないとな」

「勿論よ。それもね」

それはわかっているというのだ。

「けれどね」

「奇麗にするのは」

「それは忘れないことよ」

このことはだ。くれぐれもというのだ。

「わかってくれるかしら」

「わかってるさ。じゃあな」

こうした話をしてであった。

彼は朝の団欒から学校に向かうのだった。彼の運命はまだ動いてはいなかった。それを知っている者も。今はここにはいなかった。

第一話 完

2011・7・4

第二話 銀髪の美女その一

久遠の神話

第二話 銀髪の美女

登校した上城にだ。クラスメイト達が声をかける。

「おい、聞いたか」

「昨日凄いことがあったんだよ」

「昨日って？」

それを聞いてだ。彼もふと目を動かした。

そのうえでだ。こう彼等に尋ねた。

「昨日何かあったの？」

「何かな、急に道の木が燃えてな」

「真夜中にな」

「真夜中に木が？」

それを聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。

そしてそのうえでだ。彼等にまた尋ね返した。

「放火とか？」

「そうみたいだな。おかしな放火魔だよな」

「家じゃなくて木を狙うなんてな」

「おかしいだろ」

「おかしいね」

実際にそうだとだ。彼も言った。

「っていうか真夜中になんだ」

「朝通勤の人が見て騒ぎになったんだよ」

「それまであった木が急に燃えててな」

「しかも何本もな」

「聞けば聞く程おかしな話だね」

また言う上城だった。

「一体誰がやったんだろうね」

「なっ、おかしいだろ？」

「変な放火魔もいるよな」

「しかもどうやって燃やしたのかもまだわかってないんだよ」

ライターなりマッチなり。そして油や火薬さえもわかっていないというのだ。

「本当に自然に燃えたって感じでな」

「こんな放火ってないらしいんだよ」

「そうだね。普通はないね」

それはその通りだとだ。言わずともだった。

「そんなのって」

「おかしい事件だよ」

「そんな話もあるしな」

「後な」

ここで話が変わった。その話は。

「大学に凄い奇麗な人がいるぜ」

「そうなんだ」

その話にはだった。上城は今一つの反応を見せた。

「まあいるよね。そういう人も」

「おい、反応薄いな」

「彼女いるからかよ」

「勝ち組の余裕かよ」

周りがそんな彼にやっかみ半分で言う。

「やっぱり花持ってるって花の話聞いても余裕だな」

「いいね、この」

「羨ましい奴だよ」

「ま、まあそれはね」

そのやっかみの言葉にだ。上城自身もはにかんでしまった。それからだ。

彼にだ。最初に話を出したそのクラスメイトがこう話した。

「それでその美人さんな」

「ああ、大学の」

「どういう人なんだよ」

「ギリシアからの留学生なんだよ」

まずは国籍から話される。

「そこから来た人でな」

「ああ、ギリシアっていうと」

「あの神話で有名な国だよな」

「オリンピックとかな」

「あの国だよな」

皆ギリシアについての話をはじめた。その話からだった。

「あの国からの人なんだ」

「じゃあ外人さんか」

「だよな、絶対に」

「ああ。銀髪で目が緑色でな」

次は外見的特徴から話される。

第二話 銀髪の美女その二

「それが凄く目立ってな」

「とにかく綺麗な人か」

「そうなんだな」

「ああ、俺も一回見たけれどな」

その人をだというのだ。

「モデルみたいに背が高くてすらりとしててな」

「おいおい、モデルかよ」

「さらに凄いじゃねえかよ」

「とにかく一度見たら忘れられない位だよ」

そうした話を聞いてであつた。周りも。

羨ましい顔になってだ。それで言うのだった。

「一回見てみたいよな」

「そんなに綺麗な人だとな」

「大学に行くか」

「そこでな」

「部活は弓道だつてさ」

彼はその部活のこと話した。

「アーチェリーもやってたかな」

「どっちにしても弓か」

「弓と弓掛け持ちしてんだな、その人」

「弓好きなんだな」

「そうみたいだな」

実際にそうだとその彼も話す。

「けれど他のスポーツもな」

「できるっていうんだ」

「スポーツ万能なんだな」

「つまりあれか」

ここでクラスメイトの一人が言った。

「スポーツ万能の美人の留学生のお姉さんか」

「一言で言えばそうだよな」

「そういう人だよな」

他の面々もそれで納得する。

「ふうん、そういう人がか」

「大学にいるのか」

「交際できたらいいな」

一人がこんなことを言った。

「俺丁度フリーだしな」

「馬鹿、そんなポイント高い人が御前の彼女になるかよ」

「贅沢言うなよ」

それはすぐに周りに否定された。

「まあとにかく。大学にいて弓やってる留学生の人か」

「その人なんだな」

「髪は銀色で目が緑で」

「モデルみたいな人か」

皆それぞれ言ってくる。そしてだった。

その話をしてだ。それは上城の耳にも入った。

その話をだ。昼にだ。

小柄で黒髪をロングにした垂れ目の女の子にだ。話すのだった。

二人は今食堂で二人用の席に向かい合って座って食べている。そうしながらだ。上城はその女の子、八条学園の制服の一つである。

青いブレザーと赤いタートンチェックのミニスカートと赤いネクタイの彼女にだ。きつねうどんを食べながら話した。

「そういう人がいるらしいんだ」

「ああ、その人ならね」

女の子もだ。すぐに彼に応えてきた。彼女はざるそばを食べている。

「知ってるわ」

「えっ、樹里ちゃん知ってるの」

「ええ、私新聞部じゃない」

「それでなんだ」

「そうよ。新聞部だから」

それで情報を得ているとだ。彼女村山樹里は話すのだった。

「聞いてたわ」

「それでなんだ」

「ギリシアから来た留学生の人よね」

「そうらしいね」

「それで髪は銀色で」

樹里はこのことも言ってきた。

「目は緑よね」

「そうそう、そう聞してるよ」

「あとは弓が得意で」

「背も高いらしいね」

「聞してるわ。その人のこと」

実際にそうだとだ。樹里はざるそばをすすりながら上城に話す。

「銀月聡美さんね」

「銀月って」

その名前を聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。

第二話 銀髪の美女その三

それでだ。きつねうどんの揚げを食べながら樹里に話した。

「それって変わった名前だけれど」

「それでももっていいのね」

「日本人の名前だよ」

「何でもハーフらしいのよ」

「ハーフ？」

「国籍はギリシアだけれど日本人の血を引いていて、それでだというのだ。」

「その関係でね。お父さんかお母さんのお家もあって」

「それで日本の名前なんだ」

「そうみたいよ」

こう上城に話すのだった。

「それがその留学生の人らしいわ」

「成程、そうなんだ」

「それがその銀月さんって人なのよ」

「銀月さんね」

「一度御会いしてみる？」

樹里は自分から上城に言った。

「今日にでも」

「今日にでもって」

「そう。興味あるのよね」

「僕は別に」

「私があるから」

樹里はいささか強引にこう上城に話した。

「だから来て」

「そつなるんだ」

「取材も兼ねて」

半分以上理由付けだがそれでもだというのだ。

「一緒に来て」

「話変わってない？」

「けれどいいじゃない」

話の強引さが強くなっていた。

「上城君も興味あるんだし」

「僕は別に」

「興味があるから話すんじゃない」

「だからだっていうんだ」

「そう。じゃあ今日の放課後ね」

「部活の前にね」

こうして話は樹里のペースで決まったのだった。そしてだ。樹里は今度はだ。こんなことを言ってきた。

「あとね」

「あと？」

「銀色の髪って」

そのだ。銀髪について話すのだった。

「白髪とかそういうのじゃないわよね」

「違ってみたいだよ」

「歳を取ったみたいなのじゃなくて」

「そう、そのままのね」

「銀髪なの」

「ちよつと想像できない？」

「実は」

そうだとだ。樹里は首を傾げさせながら言うのだった。

そのうえでだ。ざるそばと一緒に注文した天井を食べてからだつた。上城に話す。尚上城は上城で親子丼も一緒に食べている。

「銀髪って始めて見るのよね」

「地毛のはだね」

「そうなのよ。地毛の銀髪って」

「日本人にはいないからね」

「そうでしょ。白人の人でも
どうかというのだ。」

「見たことないのよ」

「プラチナブロンドっていったんだっけ」

「金髪よりまだ珍しいのね」

「金髪の人は多いじゃない」

特にゲルマン系に多い。ゲルマンといえば金髪に碧眼であるという認識は上城だけでなく樹里にもわりかし強く存在している。

「だから別に」

「珍しくないけれど」

「銀髪はね」

「確かに。言われてみれば」

話をしているうちにだ。上城も思うようになった。

第二話 銀髪の美女その四

それでだ。こう彼女に話した。

「僕も銀髪の人は」

「あまり見たことないのね」

「テレビでもね。白い髪の人はいたけれど」

「あつ、昔のアメリカ大統領でいたわよね」

「クリントンだったっけ」

「そう、あの人」

民主党の大統領であつた。女性問題で有名だがアメリカ経済を立て直したことで功績があつた。彼の髪は白い髪だったのである。

「あの人の髪は白だったわよね」

「だよ。白い髪は見たことあるけれど」

「銀髪は」

「ないよね」

「実際のところね」

そうだとだ。二人で話すのだった。

そしてだ。樹里はさらに話していく。

「まあ緑の目はね」

「それは普通にあるよね」

「あつちの人じゃ多いわよね」

「結構ね。多いよ」

「何はともあれどんな人か」

「御会いたいんだね」

「取材でね」

あくまでそれを理由としての話だからこう言つたのだ。

「行くわよ」

「それじゃあ僕もだね」

「ボディーガードで来て」

「やれやれだね」

こうした話をしてだった。上城は樹里のお供で剣道部の前に新聞部の取材、名目上はそうなっているに付き合ってた。大学に向かうのだった。

八条大学は高等部のすぐ隣にある。キャンパスの面積は大学の方が圧倒的に広い。大学の方が広いのは当然と言えば当然である。

その大学に入ってた。樹里はまずこう言うのだった。

「やっぱりあれよね」

「やっぱりって？」

「この大学って広いわよね」

こう上城に言うのである。キャンパスは木々も多くまるで森の中に大学がある様である。その中を通りながら話をしているのである。

「下手したら迷いそうよね」

「實際道に迷うかもね」

その可能性は否定しない彼だった。

「これだけ広いと」

「そうよね、ここは」

「高校の何倍あるかな」

「ええと、学部が幾つあったかしら」

「三十はあったんじゃないの？」

「三十って」

まずその数にだ。絶句する樹里だった。

それでだ。呆れた様にこう言うのだった。

「普通五つか六つよね。大学の学部って」

「この大学って総合大学だからね」

「それでも三十ってかなり多いわよ」

「いや、三十以上あったかな」

上城はこんなことも言った。

「とにかく何十もあるから」

「三十よりまだなの」

「あつたんじやないかな。日本で一番学部と生徒数の多い大学らしいから」

「キャンパスの面積もよね」

「そう、全部ね」

とにかくだ。異様に広くて大きいマンモス校なのだ。尚彼等の通う高等部にしても高校としては相当な大きさの学校である。こちらの生徒数も高校としては日本一なのだ。

その学園の中にいてだ。樹里は言うのである。

「広い学校もこうした時は」

「困るんだ」

「かなりね」

そうだと上城に不平を漏らす。

第二話 銀髪の美女その五

「本当に迷いそうよ」

「大丈夫だよ」

だが彼は笑顔でこう彼女に返した。

「それもね」

「大丈夫なの？」

「大学のことは知ってるし」

だからだというのだ。

「何処に何があるのかね」

「大学によく行くの？」

「部活のランニングコースだから」

「ああ、それでなの」

「そう、それでね」

道は知っているというのだ。

「広いからね。ランニングコースに向いてるから」

「だから知ってるの」

「そう。大学のことは結構詳しいよ」

「じゃあ道案内お願いできる？」

「だから行っただけだよ」

「わかったわ。それじゃあ」

「それで行く場所は？」

上城が尋ねるとだ。樹里はすぐにここだと答えた。

「弓道部の道場よ」

「そこにいるんだ」

「それかアーチェリー部の練習場か」

「あつ、隣同士だよその二つの場所って」

「隣同士なの」

「そう、だからどっちに行くにしてもね」

どうかというのだ。

「そのどっちにもね」

「行けるのね」

「そう、行けるから」

便利だというのだ。

「じゃあどっちにしてもその銀月さんはそこにいるから」

「行きましょう」

こうした話をしてだった。二人は。

まずはその弓道場に向かった。そこに行くと。

的に向かってだ。白い上着に濃紺の男女が弓を次々に放っていた。

床は和風の木のものでありそこからだ。狙いを定めて放っていた。

それを見てだ。樹里はまずこう言った。

「弓道の服って」

「稽古着だね」

「あれって剣道のとはまた違うのね」

「うん、違うよ」

その通りだとだ。上城も答える。

「剣道着は弓道のよりも厚いんだ」

「生地が違うのね」

「うん。ただ剣道着も白はあるけれどね」

「女の子が着るあれね」

「そうだよ。ただ弓道も」

見ればだ。上下共に濃紺の者もいた。それは。

「男の人はそうだよね」

「紺色の人もいるわね」

「まあ。最近は柔道着も色があるし」

所謂カラーの柔道着だ。国際試合等で着る。

「こうしたところは寛容になってるね」

「何か女の人でも紺色の人いるわね」

「そうだよね。とにかくね」

「ここにいるのかしら」

樹里は首を捻りながら周囲を見回して話した。

「その銀月さんは」

「髪の毛が銀色だったよね」

「そう。それもかなり綺麗な」

そうした髪の毛だというのだ。

「そうした髪だっていうけれど」

「じゃあすぐにわかるよね」

「何処にいるのかしら」

樹里はまた周囲を見回す。その中でだ。

樹里はだ。その彼女を見つけたのだった。

「あっ」

「いたの？」

「あの人じゃないの？」

上城は道場に入って来た白い上着と袴のその人を見て樹里に話した。

第二話 銀髪の美女その六

「ほら、髪の毛の色が」

「そうね。あの人ね」

見ればだ。まさに彼女だった。

見事な銀髪を後ろで束ねている。そして目は緑色だ。

モデルの様な長身ではつきりした顔立ちだ。その彼女を見てだ。

彼は樹里に言うのだ。

「銀髪でしかも」

「目が緑色で」

「モデルさんみたいな美人なんだよね」

「しかも弓道部にいて」

「全部当てはまるじゃない」

こう彼女に話す。

「そうだよね」

「ええ、間違いないわね」

樹里もだ。確信して言うのだった。

「あの人よ」

「じゃあ今から取材？」

「八条大学弓道部に突如として現れたホープ」

タイトルは今適当に考えたものだ。

「その人に今からね」

「突撃取材だね」

「ええ、行くわよ」

「それじゃあ聞くよ」

その樹里にだ。上城は問うた。

「紙とかレポート用紙は？」

「持っていない筈がないじゃない」

返答は即答だった。

「それは」

「ああ、持つてるんだ」

「当たり前でしょ。新聞部よ」

だからだとだ。樹里はいささか胸を張って言う。小柄な彼女が胸を張るがそれでもだった。背の高い上城からはつむじが見えてしまった。

そのつむじを後ろから見ながらだ。彼は言う。

「持っているんだ」

「だから。持っていない筈ないじゃない」

「てつきり。理由付けだっと思ってたよ」

その銀髪の留学生に会う為のだというのだ。

「違ったんだ」

「ま、まあね」

その問いにはだった。樹里は胸を反らすのを止めて。

そのうえで視線を右に流して。後ろの上城に答えた。

「それはないから」

「だったらいいけれど」

「何度も言っけれど私は潔白よ」

「ここで潔白って言葉は使うのかな」

「使うわよ。いいのよ」

用途による言葉だった。ただし己で潔白と言う場合に潔白だった事は少ない。だがそれでもあえて言うのが今の樹里だった。

こう言い張ってからだ。彼女はあらためて彼に告げた。

「じゃあ行きましょう」

「うん、話長くかかったけれどね」

「それは気のせいよ」

「気のせいかな」

「そうよ、気のせいよ」

樹里はここでも強引だった。

「とにかくね」

「うん、あの人に取材だね」

「そういうことよ」

こう話してだった。彼等は。

その銀髪の美女のところに行きだ。声をかけたのだった。

「あの、すみません」

「高等部の者ですけれど」

まずは樹里が、そして上城がだった。

二人でだ。彼女に声をかけた。だが、だった。

樹里は最初に上城を見てだ。こう言ったのだった。

「貴方もなのですね」

「はい？」

そう言われてだった。彼は。

第二話 銀髪の美女その七

目を丸くさせてだ。美女に返した。

「僕ですか？」

「貴方もまた剣を」

「剣をつて」

「そうですか。また」

「ひょっとして」

美女の話を聞いてだ。彼は言うのだった。

「剣道部に入入りしていますか？」

「剣道ですか」

「はい、実は僕高等部の剣道部なんです」

このことを美女に話す。

「それで大学にも出入りしてますけれど」

「大学の」

「それで御存知だったんでしょうか」

こうだ。美女に怪訝な顔で尋ねるのである。

「そうなんですか？」

「それは」

「とりあえず今は」

美女は言葉を止めた。その彼女にだ。

彼はだ。こう言うのだった。

「取材に付き合って来ました」

「はい、八条学園高等部新聞部です」

樹里が明るい声で美女にまた声をかける。

「宜しく御願いますね」

「こちらこそ」

美女は樹里の言葉に微笑みだ。そうしてだった。頭を深々と、日本のお辞儀をした。それからだ。

彼女にだ。こう話した。

「ギリシアから来ました」

「留学生の方ですね」

樹里はこのことも名前も既に知っているがだ。あえて言わずに彼女の話を受けて話した。

「ギリシアからの」

「名前は」

美女は様式美の如くだ。今度はこう話した。

「銀月聡美といます」

「日本のお名前ですね」

「父が日本人ですから」

「それで日本のお名前なんですか」

「そうです。ですが国籍はギリシアです」

この辺りはやや複雑だった。名前は日本のもので家族の一方も日本人であるがだ。国籍はギリシアにあるというのである。それにだった。

「ずっとあの国で育ってきました」

「ギリシア生まれのギリシア育ちでした」

美女、銀月聡美はまた話した。

「そうなんです」

「そうですか。ハーフで」

「それで」

「そうなります。日本に来たのは」

「それはどうしてですか？」

「勉強の為ですよね」

「いえ」

ところがだった。

聡美は急に顔を曇らせてだ。こう答えたのである。

「止める為です」

「止める！？」

「止めるといいますと」

「あの方がこれ以上過ちを犯されるのを止める為に
そうだというのである。」

「それで日本に」

「過ち!？」

「過ちつていいますと」

二人は彼女のその言葉に首を捻つてだ。

あらためてだ。こう彼女に尋ねたのだった。

「何ですか、それ」

「妙な感じがしますけれど」

「あつ、いえ」

己の言葉を遮つてだ。聡美はこう二人に話した。

第二話 銀髪の美女その八

「言葉のあやです」

「あやですか」

「そうでしたが」

「初対面の方がおられますと」

「どうだというのだ。そういう相手が目の前にいると。」

「自然と気を張り詰めてしまつて」

「それで、となるんですね」

「ですから」

「はい、すいません」

「こつ言つてだ。二人に頭も下げもする。」

「変なことを言つてしまいました」

「いえ、それはいいです」

「御気に召されずに」

樹里だけでなく上城も彼女を慰める様にして言つ。

そのうえでだ。樹里は。

話が一旦途切れたのを見てだ。彼女から言つたのだった。

「あの、それでなのですから」

「それでとは？」

「弓のことです」

このことをだ。聡美に尋ねたのである。

「今弓道部とアーチェリー部に所属しておられますね」

「はい」

「両方やつておられるのですか」

「弓は好きなので」

それでだ。聡美は樹里の問いに答えて話す。

「両方させてもらっています」

「私は弓のことはよく知りませんが」

このことは断る樹里だった。

「ですが弓道とアーチェリーは細かいところが随分違うそうですね」
「そうです。弓であることは同じですけど」

「そのことについては違和感はありませんか？」

こう聡美に尋ねるのだった。

「両者の違いには」

「弓は。どれであっても弓ですから」

これが今の樹里の問いへの聡美の返答だった。

「特に」

「ないんですか」

「弓はどうであっても得意です」

自信が見られる言葉だった。

「弓なら」

「そうですね。弓なら」

「はい、得意です」

また言う聡美だった。

「持っているだけで幸せになれます」

「それはまたかなりですね」

「弓を使った狩もしていました」

「狩もですか？」

「ギリシアにいた頃は」

「していたというのだ。弓を使った狩を。」

「それでよく山の中を駆けました」

「それはまた凄いですね」

「狩もしていたというのを聞いてだ。樹里は目を丸くさせてだ。
レポート用紙に素早く書きながらだ。聡美に言葉を返した。

「狩までされていたのですか」

「流石に日本ではしていませんが」

「日本ではですね」

「はい、それは」

していないというのだ。

「ただ。陸上はです」

「あつ、御聞きしています」

陸上と聞いてだ。樹里はその顔をはつきりとしたものにさせた。そのうえでだ。彼女にこう話す。

「陸上部にも入っておられるとか」

「駆けるのも好きなので」

また答える聡美だった。そうした話を聞けば随分とスポーツに秀でている留学生に聞こえる。少なくとも樹里も上城もそう思った。

「それで」

「アーチェリーと陸上で」

さらに言う樹里だった。

「選手だったそうですね」

「そうだったこともありました」

「陸上の選手でもあつたんですか」

それを聞いてだ。上城が言う。

第二話 銀髪の美女その九

彼は聡美を見ながらだ。その彼女に話した。

「そういえばそんな感じですね」

「おわかりになれるのですか」 6

「何となくですが」

「わかるというのだ。」

「それでなんです」

「そうですか。実は私も」

「銀月さんも？」

「わかることがあります」

上城を見て。そのうえでの言葉だった。

「貴方のことについて」

「僕のことですか」

「はい、わかることがあります」

こうだ。その上城を見ながら話すのだ。

「貴方は剣道をされていますね」

「そうですけれど」

「この国の剣道をですね」

「はい、今もこれが終わってから」

するというのだ。その剣道をだ。

「そのつもりです」

「そうですね。そしてです」

「そして？」

「そのことが」

まだ彼を見ている。そうしてさらに話すのである。

「貴方を大きなことに導くでしょう」

「剣道をしていることがですか」

「もっと言えば剣道をしていること」

聡美はさらに言う。

「そのこともまた」

「剣道をしていることが」

「運命ですから」

「剣道をしていることが運命なんですか」

「遙かな時代より」

話は遡る。そこまでだ。

「それは決まっています」

「僕が剣道をしていることが？」

「貴方はこの時代のこの国でもまた」

聡美の顔が変わった。悲しむものに。

そしてその悲しむ顔でだ。さらに話す彼女だった。

「貴方は闘い続けるのですね」

「？さつきから何を言ってるんですか？」

彼女のその話を聞いてだ。樹里は。

首を捻ってだ。こう聡美に尋ねた。

「あの、剣道とか運命とか」

「あつ、それは」

「確かに上城君は剣道をしていますけれど」

それは間違いないというのだ。確かだとだ。

「けれど。それに運命って」

「よくわからないよね」

「傍から聞いてもね」

そうだとだ。上城自身も言う。

「よくわからないよね」

「どうもね」

「あつ、それは」

二人の話を聞いてだ。それだった。

「何でもないです」

「何でもないって」

「そうなんですか？」

「はい、何となくそう思っただけで」

あくまでそれだけだというのだ。

「気にされないで下さい」

「ならいいですけど」

「そうよね」

そうは聞いてもだった。

二人はどうもだ。わからないという顔になってだ。

そのうえでだ。聡美にあらためて話す。

「妙に気になりますけれど」

「本当に何も無いんですか」

「はい、ないです」

そうだというのだ。

「特に別に」

「ならいいですけど」

「それなら」

二人も釈然としないがそれでもだった。

聡美がそう言うのならいいとしてだ。頷くのだった。

そんな話をしているうちに取材も終わってだ。それだった。

二人は聡美と別れ大学から高等部に向かう。その中でだ。

第二話 銀髪の美女その十

樹里はこう上城に話すのである。

「銀月さんだけれど」

「あの人だよね」

「変なこと言ってるわよね」

「うん、かなりね」

そうだとだ。上城は樹里のその言葉に頷いた。そのうえでだ。首を捻りながら話すのだった。

「僕がさ。何か」

「運命がってね」

「この時代でもこの国でもって」

「おかしな話よね」

樹里も言う。

「これって」

「おかしなっていうか」

「何か引っ掛かる？」

「そんな話だけれど」

「引っ掛かるっていうことは」

そのことはどうかとだ。樹里は上城に話す。

「思うところがあるからよね」

「思うところって」

「そう。何も思わなければ」

どうかというのだ。その場合は。

「引っ掛かるなんてことないじゃない」

「聞いてすぐにでも忘れるかな」

「そう。もう簡単にね」

そうなるというのだ。

「だから。引っ掛かるのは」

「何か思うところがあるから」
「何で思つかまではわからないけれど」
「それでも僕は思ってるんだ」
「心の何処かでね」
「何かそれって」
「どうかとだ。上城はここで言った。」
「余計におかしな話だよね」
「そうよね。私もそう思うわ」
「おかしな話だっていうんだね」
「それもありね」
「そうだというのだ。」
「また随分と」
「運命ねえ」
「それと剣道よね」
「ひょっとして」
首を捻りながら。上城はこう話した。
「あれかな。僕の前世がさ」
「前世ね」
「剣術家か何かで」
「それでだ。どうかというのだ。」
「そのせいで。今何かあるのかな」
「何か話がSFめいてきたわね」
「そうだね。こう考えると」
「完全にSFじゃない。それがファンタジー」
「それであれかな」
上城はいささか調子に乗った感じでだ。樹里に話す。
「僕は運命の剣士だっていうのかな」
「それで何かを果たすとかね」
「そんな面白い話かな」
「だったら面白い？」

「いや、実際にそんなことになったら」

どうかというのだ。その場合は。

「結構鬱陶しいと思うけれど」

「運命に導かれて何かをするってというのは」

「うん。それって鬱陶しいことだと思うよ」

「そうね。考えてみれば」

腕を組んで考える顔になってた。樹里も言う。

「そうなるわよね」

「そうそう。厄介なことだと思うよ」

「ましてやそれが命賭けのことだったら」

「余計にまずいわよね」

「そんなの絶対に嫌だよ」

上城は顔を顰めさせ苦笑いになって述べた。

「もうね」

「そうよね。それはね」

「まあそんなことは絶対にならないだろうけれど」

「漫画じゃあるまいしね」

「そうだよね」

笑いながらそうした話をしてだった。上城は剣道部の道場に向かう。そしてだ。

樹里は新聞部の部室に向かった。二人はそれぞれの部活を楽しみだ。健全な高校生活を送るのだった。

第二話 完

第三話 見てしまったものその一

久遠の神話

第三話 見てしまったもの

上城の学園生活は変わらない。そのままだった。部活でもだ。平和だった。

今日は部活でランニングだ。その休憩時間にだ。

スポーツドリンクを飲みながらだ。部活仲間の話を聞いていた。うちの部活ってあれだよな」

「ああ、走ってばかりだよな」

「ランニングとか。筋力トレーニングとかな」

「素振りよりそっちの方が多いよな」

「絶対にな」

「まずは体力だ」

「ここだ。その剣道部の顧問の先生が来て彼等に話す。

「だから走るんだ」

「いつもそう言ってますよね」

「だからだつて」

「そうだ。稽古はそれからいい」

「そうしたもののは二番目だというのだ。

「まずは走ることだ。部活だしな」

「部活だからですか」

「走るんですか」

「それからなんですか」

「そう、部活は楽しんで心身を鍛える為にあるものなんだ」腕を組んでだ。顧問の先生は確かに話す。

「だからだ。走るんだ」

「じゃあ勝つ為に稽古ばかりしてるのは」

「そついう教師もいるな」

先生も話す。

「そういう教師はだ」

「間違いですか」

「やっぱりそうなんですな」

「そうだ、そうした教師が考えているのは」

何かというのだ。それは。

「自分の成績をあげることだけだ」

「部活ですか？」

「それですか？」

「そう、それだ」

そのことを話すのだった。

「部活で実績をあげても得点になる」

「教師のですか」

「得点になるんですか」

「そう、なる」

また話す先生だった。

「それで生徒のことを考えずにそうした稽古ばかりさせる」

「何か嫌な話ですね」

「そんな教師もいるんですね」

上城達もここで知ることだった。

「っていうか教師に成績があるんですか」

「そうしたのがあるんですか」

「ある。そしてだ」

さらにだった。

「そうした教師は生徒が試合に負けると」

「教師の成績に関わる試合がですか」

「それに負けたりですか」

「生徒に八つ当たりをする」

こうした教師が実際にいるのが我が国の教育界だ。それだけ歪み腐りきっているのだ。残念なことにそうした教師も多いのだ。

「虐待にもつながる」

「虐待、ですか」

「そんなこととして許されるんですね」

「それが教師の世界なんですね」

「残念なことにな」

まさにその通りだというのだ。

「その教師が前に大学でやられたあの教師だ」

「あいつだったんですか」

その話を聞いてだ。上城は驚きの声をあげた。

そしてそのうえでだ。顧問の先生に言った。

「あの中学校の」

「あいつのことは知っていた」

顧問の先生は不機嫌そのものの顔で話す。

「中学生相手に突きをして罵倒の限りを尽くしていた」

「そうらしいですね」

「中学生に突きって」

「竹刀を蹴飛ばし床で背負い投げをしていた」

そうしたことも知っている先生だった。

「最低の人間だった」

「ですよ。そこまでするって頭おかしいでしょ」

「相手まだ子供じゃないですか」

中学生ならだ。こう言ってもよかった。

第三話 見てしまったものその二

「ついこの前までランドセル背負っていた子供相手にですか」

「そんなことしてたんですか」

「俺が成敗しようかと思ってた」

顧問の先生もだ。そう考えていたというのだ。

「だがその前にだ」

「大学でやつつけられたんですね」

「悪事も暴かれて」

「それで今は剣道界にもいない」

追放されたというのだ。

「もう竹刀を握れないどころか身体を動かせないようにもなった」

「当たり前ですよ、それって」

「当然の報いですよ」

「比良屋経市楼といったな」

その教師の名前も話される。

「その教師の名前は」

「それでその教師がですね」

「再起不能になったんですね」

「それで今度刑務所に入ることになった」

まさに最高の因果応報の流れだった。

「いいことだ」

「ですね。本当に」

「というかそんなのが教師で剣道教えてたって」

「とんでもないことなんじゃ」

「そうだ。とんでもないことだった」

まさにそうだとだ。先生も話す。

「しかしそれもあらためられた」

「あの大学生の人っていいことしたんですね」

「ですよ」

「成敗されなければならぬ悪もある」

時代劇の様な話だ。しかしこれも現実だった。

「そういうことだ」

「ですね。本当に」

「その通りですよ」

「それで俺はだ」

先生はここで話を変えた。

「御前等は走らせる」

「まずは体力ですね」

「そこからですね」

「そうだ。とにかく走れ」

「走るんですね」

「まずは」

「そうだ。何ごと走つてからだ」

先生の言葉は変わらない。

「ただしだ」

「ただし？」

「ただしつていいですよ」

「兎跳びはさせないからな」

それは絶対だというのだ。

「あの中学の教師はさせていたそうだがな」

「あの、兎跳びつて」

「あれまずいでしょ」

「そうでしょ」

兎跳びと聞いてだ。上城達もだ。

顔を顰めさせてだ。それぞれ言った。

「あれは足腰痛めるんですよ」

「特に膝を」

「そんなのとつくの昔にわかってません？」

「それをさせていたって」

「その教師何だったんですか？」

「馬鹿だ」

先生の言葉は鞭になっていた。

「そんなこともわからない体育教師だった」

「体育教師こそ一番わかることなんじゃ？」

「だよな。そういうのって」

「身体を動かして扱うことを教えるんだから」

「それがまずわからないって」

「知らないにしても」

「そこまでの馬鹿でも先生になれるんだな」

そしてこの結論が出たのだった。

第三話 見てしまったものその三

「世の中って凄いよね」

「っていうか有り得ない？」

「普通の世界じゃ絶対に通用しないよな、そんな馬鹿」

「それで生徒を教えてるって」

「世の中怖いよね」

「世の中色々な人間がいる」

「そうだと。また話す先生だった。」

「教師も色々だ」

「そうしたおかしな先生もいるんですね」

「つまりは」

「他の仕事でもだ」

先生はまた話した。

「俺も剣道をしていてわかったことだがな」

「色々な仕事の人がそれぞれ剣道をしていてですか」

「それでわかったんですね」

「そうだ。わかった」

それを通じてだというのだ。

「色々な仕事で色々な人間がいる」

「どの仕事でもとんでもない奴はいるんですね」

「剣道をしている人間でもですね」

「いるんですね」

「逆もあるがな」

素晴らしい人間もいるというのだ。中には。

「しかしそうした人間に出会えればだ」

「そうした時はどうすればいいんですか？」

「俺そんな人間に剣道教わりたくないですけど」

「僕ですよ」

「そうだよな。そんな人間が教える立場だと何してくるか」

「それこそわからないから」

「そうした人間は避ける」

これが先生が彼等に言うことだった。

「近くにいれば碌なことにならない」

「だからですか」

「そうした人間ってわかればですか」

「もう逃げるべきなんですね」

「そんな奴からは」

「そんな人間に教えられても何にもならない」

だからだともいうのだ。

「教えられることは碌なことじゃない」

「それか身体壊すか」

「そうしたことですよ」

「大体わかる。おかしい人間は」

こつも話す先生だった。

「その行動でな」

「わかるんですか？そういうことも」

「おかしい人間だってことも」

「そうしたしてはいけないことをする」

中学生に突きをしたり反則を取られる技を浴びせたり。あまりにも酷い罵倒や体罰をすることこそがだ。してはいけないことだといふのだ。

「だからだ。それはだ」

「そうしたことからわかるんですか」

「暴力からですか」

「そういったことからわかる」

「そうなんですね」

「その通りだ。その行動がおかしい教師には教わるな」

先生は彼等に強く言う。

「絶対にだ」

「わかりました。そうします」

「さもないと危ないですよ」

「碌でもない人間には教わらない」

「そういうことですね」

「その通りだ。まともな人間かどうか見極めてだ」
「それでだというのだ」

「その先生についた方がいい」

「あの、それじゃあですけれど」

「そういたしますと」

「どうなるかとだ。上城達は顧問の先生に対して言った」

「先生もそう思われたらですよ」

「俺達部活辞めますけれど」

「そうなってもいいんですか？」

「その場合は」

「いい」

構わないとだ。先生は毅然とした声で答えた。

第三話 見てしまったものその四

「そうなつてもだ」

「えっ、いいんですか!？」

「俺達が離れてもですか」

「それでもいいんですか」

「それは俺に問題があったからなることだ」

「先生は毅然としてだ。彼等に話した。」

「だからだ。それでそうなつてもだ」

「構わないんですか」

「そうなんです」

「そうだ。それならそれで仕方ない」

「先生はまたこう言った。」

「俺はそう思う」

「うっん、何か潔いっていうか」

「先生ってそうじゃないといけないんですか」

「それで人間もそうなんです」

「そうしたことを受け入れないといけないんですね」

「そういうことだ。自分が招いた禍は避けられない」

孟子にあることをだ。先生は強く意識しながら言葉として出したのだ。

「それはもうな」

「ですか。そうなんです」

「生徒が離れるのは顧問の先生にこそ問題があるから」

「だからですか」

「俺もだ」

「そのだ。先生にしてもだというのだ。」

「そんな教師には教わりたくない」

「そうした暴力教師にはですね」

「教わりたくないんですね」

「そうだ。絶対にな」

まさにそうだというのだ。

「何があってもな」

「ですね。それは誰でもですよ」

「正直何されるかわかりませんから」

「じゃあ俺達も気をつけます」

「そんな先生には」

「それでこうも思うな」

先生は話を変えてきた。

「そんな人間にはなりたくないと思うな」

「ですん。そんな暴力的な人間にはとてもですよ」

「なりたくないですよ、それこそ」

「本当に何があってもですよ」

「なりたくないです」

そのことについてもだ。彼等も答えた。

「何ていいですか。最低ですから」

「自分がやられても嫌ですし」

「自分がそんな人間になつたらですよ」

「最低ですから」

「そういうことだ。自分がやられて嫌なことはだ」

まさにだ。そうしたことはだというのだ。

「絶対に他人にはしない。そしてだ」

「自分がそうした嫌な人間にはですね」

「絶対になつたらいけない」

「そうですよね」

「そうだ。まああの教師はな」

中田に成敗されただ。その暴力教師はどうかというのだ。

「いい反面教師だ」

「そうした教師なんですね」

「つまりは」

「最悪の教師は最高の反面教師だ」

学校はそうした反面教師の宝庫でもある。これも日教組の影響だろうか。

「あんな人間になるものかと思わせるな」

「そうですね。じゃあ俺達そんな人間になりたくないですから」

「気をつけます」

「そうします」

「ああ、そうしてくれ」

先生もそのことを心から願うのだった。そのうえで上城達と共に走るのだった。部活は確かに体力を使うが確かなものだった。その部活の後でだ。

第三話 見てしまったものその五

上城の学校の帰りは今日もだった。樹里と一緒にだ。

二人並んで楽しく話をしながらだ。下校のデートを行っていた。その中でだ。樹里が彼に言ってきた。

「あの人だけれど」

「あの人って？」

「だから。ギリシアからの留学生の人よ」

「ああ、銀月さん」

「そう、あの人ね」

そのだ。彼女のことだった。

「あの人についてどう思う？」

「どう思っつて」

「綺麗な人よね」

樹里が話すのはこのことからだった。

「日本人離れ、いえ」

「いえ？」

「何か人間からランクがあがったみたいなの」

「人間より上って」

「女神みたいな感じだけれど」

「女神ね」

「そんな感じしない？あの人」

「こう言うのである。」

「何かね」

「言われてみれば」

「そうよね。人間離れした感じね」

「うん、凄く綺麗で」

「あと。中性的？」

こんなことも言う樹里だった。

「女の人だけれど何処か」

「そうそう、健康的だね」

「スポーツをしてるせいかしら」

「そのせいかな」

「身体つきが凄く引き締まっっていて背も高くて」

樹里はここで隣にいる上城を見た。小柄なので見上げる形になっている。

「上城君と同じ位だったかしら」

「それ位かな」

「ええと、上城君は確か」

「一七八だよ」

それ位あるのだ。高い方と言っていい。

「今はね」

「じゃああの人がって」

「そうだね。一七五はあるよね」

「女の人としてはやっぱり」

「かなり高いよ」

「そうよね。私は一五二で」

彼女はそれ位だ。やはり小柄なのだ。

「何かそういうのを比べたら」

「全然違うっていうんだね」

「羨ましいわ」

ついついだ。本音も出してしまう樹里だった。

「そこまで高いなんて」

「背が高いとなんだ」

「羨ましいわ」

その本音を次第に強く話していく。

「私もそれだけあればって」

「思っんだ」

「女の子も背を気にするのよ」

「えっ、そうなんだ」

「やっぱり高い方がいいわよ」

言葉は力説になっていた。

「モデルみたいだね」

「僕はそうは思わないけれど」

樹里のその話にだ。こう返す彼だった。

「特に。そんな」

「わからないのよ、それは」

「わからないって？」

「そりゃ男の子は誰でも背を気にするけれど」

「女の子もって」

「同じだから、それは」

まだ言うのである。

「とにかく。背はね」

「背は？」

「あとハセンチは欲しいわ」

これが樹里の心からの言葉だった。

第三話 見てしまったものその六

「一六〇位はね」

「別に今のままでいいんじゃないかな」

「何でそう言えるのよ」

「いや、小柄な女の子って可愛いからだからだというのだ。

「それでね」

「可愛いって。小柄なのが？」

「そう思っけれど違うかな」

「小柄だと子供みたいじゃない」

「今度はこんなことを言う。」

「だから。本当に」

「一六〇は欲しいんだ」

「今だってね」

また上城を見上げる。何気に首を必死に上にあげている。

「あれよ。見上げるの辛いから」

「それでなんだ」

「そう。女の子も背が欲しいの」

自分のことからだ。こう話すのである。

「だから同じよ」

「そういうものなんだね」

「そういうことよ。それでね」

「うん。それで」

「あの人。あそこまで背が高いと」

やはり羨ましそうに話す樹里だった。

「あのスタイルもあつて」

「女優になれるかな」

「本人がなりたいていって言えばなれるでしょ」

自然にだ。そうなるというのだ。

「もうそれでね」

「何処かの事務所がスカウトして」

「そうなるんだ」

「何度も言うけれどそこまで綺麗じゃない」

銀髪に緑の目、そしてその白い肌も思い出しての言葉だ。当然背も。

「まさに完璧超人よ」

「完璧って」

「どう、完璧じゃない」

また言う彼女だった。

「いや、羨ましいわよ」

「ううん、その銀月さんが」

「そう、完璧じゃない」

樹里の羨望の言葉が続く。

「私もねえ。あんな感じだったらそれこそ」

「芸能界デビュー？」

「そういうのは興味ないけれど」

実はだ。そうしたことは考えていないというのだ。

「ただ。それでもね」

「羨ましいんだね」

「どうしてもそう思うわ」

この感情をだ。抱いてやまないというのだ。

「まあ。私は私だけれど」

「そうだね。あの人はあの人で」

「私は私で」

「それでいいじゃない」

これが上城の樹里への言葉だった。そして樹里も。上城のその言葉を聞いてだ。静かにだった。頷いてだ。こう返した。

「そうよね」

「そうだよ。人は人でね」

「自分は自分よね」

「だから。特に変に意識することはね」

「ないわね」

「変に強く考えたらそれこそ」

「どうなるか。上城はそのことも話した。」

「かえってよくないから」

「嫉妬したりして」

「憧れるのはいいと思うよ」

上城はその感情は肯定した。プラスの考えはだ。

第三話 見てしまったものその七

だが憧れ、羨望と逆のだ。その感情についても話した。

「けれど嫉妬はね」

「誰かを妬むのは」

「誰でもあることだけれどよくないと思うよ」

こう樹里に話したのだ。

「それはね」

「そうよね。マイナスの感情はね」

「それはその人をよくしないから」

だからだというのだ。

「僕も。誰かを嫉妬したりしてね」

「上城君が？」

「子供の頃そうした感情あったから」

「そうだったの」

「それで妬んでひがんでね」

子供の頃の経験、些細なことで誰にでもあるようなことだった。

「ほら、友達が滅多にないカードを持ってて」

「ああ、カードゲームの」

「それが欲しくて欲しくて仕方なくてね」

「妬んでたんだ」

「向こうもそれを自慢して」

本当によくあることだった。子供の頃には。これがプラモデルだったりチョコロQだったりゲームソフトだったりする。何にしる人が持っていて自分が持っていないものを見て嫉妬する。そういうことだった。

その時のことをだ。彼は今樹里に話すのである。

「もうね。我慢できなくなってる」

「カードを盗もうとしたとか？」

「そうだったんだ。気付いたらそいつの家にこっそり忍びこもつて
していて」

「それで」

「いや、偶然だったんだ」

さらにだ。その時のことを話していく。

「そこでそいつの家の犬が鳴いて」

「あつ、犬がなの」

「立ち止まって。自分がしようとしていることに気付いて」

そこで良心が働いたというのだ。良心というものは急に動くこと
もあるのだ。

「それで慌ててそこから逃げ去ったよ」

「そんなことがあったの」

「本当に危なかったよ」

こう樹里に話すのだった。

「危なかったよ」

「そうね。もう少しでね」

「悪いことをするところだったよ」

「上城君にもそういうことがあったのね」

「そうだったんだ」

あえてだ。その話したくない過去を話したのだ。

「だから。妬みは」

「よくないことよね」

「よくない結果を生み出すことが多いよ」

そうだとだ。また樹里に話した。

「気をつけないとね」

「そうよね。私も」

「けれど憧れはね」

それはどうかというのだ。そちらの感情は。

「いいと思うよ」

「それはいいのね」

「うん。憧れる人や存在には近付きたいよね」
上を、そして前を見ての言葉だった。

「そうだよな」

「ええ。そうした人には」

「だから。努力するから」

それによってだ。どうなるかともいうのだ。
「いいと思うよ」

「努力して。自分が高まっていくから」

「僕もね」

「上城君も」

「そう思ってるよ」

樹里の方を向いて話す。

第三話 見てしまったものその八

「それが大事だと思っけれど」

「そうね。じゃあ私も」

「そのままでもいいよね」

「うん、そうね」

笑顔で上城に応えた。そしてだった。

そんな話をして楽しく下校のデートを楽しんでいた。しかしだ。急にだ。二人の前にだ。

突然青黒い煙が出て来て。そうして。

翼を生やした女が出て来た。その女は。

獅子の身体を持っている。乳房は人間の女だがそうした姿だった。その姿の異形の女が出て来てだ。上城に対して言ってきたのだった。

「水ね」

「水!？」

「水の剣士」

こう彼に言うのだった。

「出て来たのね」

「出て来たって何が」

「水も出て来たとなると」

だが、だった。女は。

自分だけで言葉を続けていく。そしてだった。

「面白いわね」

こうも言ったのである。

「これはね」

「面白いつて。だから何が」

「相手にして」

どうかというのだ。

「不足はないわね」

「これってまさか」

ここだ。樹里がその女、翼を生やし獅子の身体その女を見て言った。

「あれよ。スフィンクスよ」

「スフィンクス？」

「そう、あれよ」

こう彼に話すのである。

「そのままの姿じゃない」

「えっ、けれどスフィンクスって」

上城は驚いた顔で樹里に応えた。

「あれじゃない。男の人の頭に」

「それでライオンの身体っていうのよね」

「そうじゃないの？」

「あれはエジプトのスフィンクスだから」

また違うというのだ。

「またね。違うのよ」

「そうなんだ」

「ギリシアのスフィンクスはまた違うの」

「うっん、そうだったんだ」

「そうよ。ギリシアのスフィンクスは」

「今日の前にいる」

それなのかとだ。上城は樹里に尋ねた。

「そうだったんだ」

「ほら、朝は四本で」

樹里は今度はこの話をはじめた。

「昼は二本で」

「夜は三本だよ」

「それで歩く生き物は何かっていう謎々だけれど」

「あれだったんだ」

「そう、それを言うスフィンクスがね」

それがだというのだ。

「今日の前にいる」

「このスフィンクスなんだ」

「そう。ギリシア神話のスフィンクスなのよ」

こう樹里は話す。その話を受けてだ。

上城はスフィンクス、その異形の女を見てだ。こう言った。

「じゃあここでも？」

「悪いけれどそれはもうしないわ」

スフィンクスは剣呑な調子でそれは否定した。

「もうね」

「謎々はしないんだ」

「闘いよ」

それをするというのだ。

「それをするわ」

「闘いつて」

「さあ、早く出しなさい」

上城を見据えて言い返す。

第三話 見てしまったものその九

「今からね」

「出すって何を」

「剣よ」

「ここでも一方的に話すスフィンクスだった。

「それを出して。闘うのよ」

「刀なんてないし」

「上城は剣と刀を同じものと解釈して話した。

「あるのは木刀だけれど」

「何かしら、それは」

「つて木刀知らないんだ」

「スフィンクスの言葉に少し戸惑って返した。

「じゃあ竹刀も」

「知らないわよ、そんなのは」

「やはりこう言うのだった。

「全くね」

「けれど刀なんて」

「背中竹刀袋を見て言う彼だった。

「持っていないし」

「持っていないというのね」

「そうだよ。真剣だよね」

「スフィンクスに対して問うた。

「そんなのは」

「そう。まだなのね」

「今度はまだって」

「まだなら早く言うのね」

「今度はこんなことを言うスフィンクスだった。

「呆れたわ」

「呆れたって言われても」
「剣を持たない相手とは闘わない」
「スフィックスはまた言った。」
「それが決まりだから」
「だから。決まりって何なのさ」
「神の定めた決まりよ」
「神様!？」
「そう。夜を輝かせる神」
「その神が定めたことだというのだ。」
「その神との約束だから」
「神様っていったら」
樹里はまた首を傾げさせながら話した。
「ええと。このスフィックスはギリシアのだから」
「ギリシアを知ってるのね」
「一応はね」
「そうだとだ。樹里もスフィックスに話す。」
「その神様になるけれど」
「とにかく。剣を持っていないのなら」
「どうかと。また話すスフィックスだった。」
「帰りなさい」
「何もしないんだ」
「私はね」
彼女、スフィックスはそうだというのだ。
「決まり。守る魔物も少ないけれど」
「魔物って？」
「私達の呼び名よ。怪物だの妖怪だのもあるわね」
「それがなんだ」
「何とでも呼ぶといいわ。とにかくね」
「今はなんだ」
「そうよ。帰りなさい」

また言うその怪物だった。

「剣を持った時にまた会いましょう。ただね」

「ただ？」

「他言は無用よ」

このことは釘を刺すのだった。

「わかつているわね。それに」

「貴女みたいな存在に会ったなんて」

ここで言ったのはまた樹里だった。

第三話 見てしまったものその十

「言っても誰も信じないけれど」

「そうでしょ。それよ」

「けれどなのね」

「そう。他言はしないことね」

「若し言えばその時は」

「容赦しないわ」

決まりがあっても。それでもだった。

「その場合に限ってね」

「そうなんだ。じゃあ」

「早く帰りなさい。何もしないわ」

スフィックスは二人にこのことは確かに保障した。

「お家にね」

「何か知らないけれどね」

「助かったみたいね」

上城と樹里はお互いの顔を見て話をした。

「結構話のわかる怪物みたいだし」

「運がよかったかしら」

「ええ、貴方達運はいいわ」

それはその通りだとだ。スフィックスは二人にこのことも話した。

「実際におかしな怪物達だとね」

「僕達ここで」

「剣を持っていなくても」

「食べられていたわよ」

実際にだ。そうだというのだ。

「私達は人間も食べるから」

「スフィックスってそうだったわね」

樹里はまたギリシア神話から話をした。

「謎々に答えられなかった人を」

「食べていったわ」

「だから。それで」

「他の怪物も同じよ。やはりね」

人をだ。餌食にするというのだ。

「剣を持つ者は特にね」

「剣を持つ人間はなんだ」

「まあ。そのうちわかるわ」

スフィックスは上城、その彼を見てまた話した。

「そうしたことがね」

「そのうちって」

「まあ。それじゃあ話は終わったから」

魔物から話を打ち切ってだった。そのうえで。

スフィックスは姿を消した。煙の様に。そして後に残ったのは。

上城と樹里だった。二人は顔を見合わせてだ。

そのうえでだ。お互いに話すのだった。

「今のって」

「夢じゃないわよね」

「そうだよ。どう考えても」

「ちよつと確かめてみる？」

樹里は首を捻りながらこんなことも言った。

「一回ね」

「確かめるっていうと」

「頬っぺた抓り合おう」

実際にはそうしようというのだ。

「それでわかるわ」

「そうだね。これで夢でなかったら」

「痛いわ」

それで目が醒めてだ。わかるというのだ。

「だからそうしましょう」

「じゃあ」

「それじゃあ」

こうしてだった。お互いに頬を指で掴み合ってた。そのうえで抓ってみた。すると。

「痛いよね」

「痛いわ」

抓ってわかったことだった。お互いにだ。

「というとやっぱり」

「夢じゃないのね」

「うっん、他言は無用って言ってたけれど」

「こんな話誰も信じないわよ」

まさにそうだった。あまりにも非現実過ぎてた。

二人がわかるのはそのことだった。それだけだった。

第三話 見てしまったものその十一

首を捻りそのうえでだ。現実であることを確かめた。
そしてだった。二人でだ。

その場を去ろうとした。しかしだった。

ここだ。また出て来た者がいた。それは。

中田だった。彼は上城の姿を見てだ。こう言ったのだった。

「あれっ、あんた確か」

「あつ、貴方は」

「ああ、中田さ」

自分からだ。笑顔で言う彼だった。

「八条大学のな」

「そうですね。剣道部の」

「何でここにいるんだい？デートかい？」

「ええ、まあ」

その通りだとだ。上城は事実を隠して応えた。

「そうですね」

「そうかい。デートもいいけれどな」

中田は上城のその話に特に何も思うところなくだ。それだった。

彼と樹里にだ。こう言ったのだ。

「あんたにそこのお嬢ちゃんもな」

「私ですか」

「そう、あんたもだよ」

樹里に対しても言うのだった。

「夜道は何かと物騒だからな。早く帰れよ」

「そうですね。最近変な人が多いっていいますし」

「だからですね」

「ああ、だからな」

それでだとだ。中田は笑って述べた。

そしてそのうえでだ。こんなことも言ったのだった。

「食われないようにな」

「いえ、流石にそれは」

「ないですよ」

二人は食べられるという言葉にはすぐに突っ込みを入れた。

「人が人を食うって」

「そういうのはちょっと」

「ないですよ」

「どう考えても」

「おっと、そうだな」

中田もだ。自分で言いはしたがそれはすぐに否定したのだった。

「人間は人間を食わないよな」

「確かにそうした話もありますけれど」

「それでもちよっと」

「現実的な話じゃないですよ」

「夢みたいな」

二人は無意識のうちに先程のスフィンクスとの話を思い出しながら述べた。

「まるで化け物が出たみたいな」

「そんな話ですね」

「じゃあ化け物でいいな」

中田は屈託のない、如何にも裏がなさそうな笑みで返した。

「とにかく。化け物に食われないようにな」

「早く帰る」

「そうするべきですね」

「ああ、そうしろ」

中田はまた二人に言った。

「早いうちにな」

「わかりました」

「確かに夜遅くはいけませんし」

真面目な二人も頷いてだ。それでだった。

中田と別れ帰路に着く。その二人を見届けてからだ。

中田は周囲を見回した。そのうえでだ。

誰かにだ。こう尋ねたのである。

「もういないのかい？」

「はい、もう消えたようです」

「そうなのか。じゃあ仕方ないな」

話を聞いてすぐに頷く彼だった。

第三話 見てしまったものその十二

「帰るか」

「そうされますね」

「ああ。あんたはどうするんだい？」

「私ですか」

「そうだよ。あんたは」

「同じです」

そうだとだ。声は中田に答えたのだった。

「これまでと同じです」

「じゃああれか」

「消えます」

「消えるのか」

「このまま」

「何かいつも素っ気無いな」

こう声に言う中田だった。

「あんたはそれでいいんだな」

「はい、私は」

そうだとだ。また言う声だった。

そしてだ。そのうえでだった。

声は今度はこんなことを言ってきた。

「それでなのですか」

「それで？」

「先程の彼ですが」

「ああ、あの高校生か」

「おわかりですね」

中田に対して。静かに問う言葉だった。

「あの彼もまた」

「剣士か」

「そうです。彼は水の剣士です」

「水な。じゃあ俺と逆か」

「はい、中田さんは火ですから」

「そこがだ。まさに正反対だった。」

「そうなりますね」

「水か。じゃああいつとは」

「戦う運命にあります」

「だよな。闘うんだよな、剣士とは」

「そして最後に残るのは」

「一人か」

中田はここで考える目になった。

「一人だよな」

「はい、一人です」

「そうなるよな。じゃあ」

中田は釈然としない顔になって。そうしてだ。

首を捻ってだ。こんなことを言った。

「やるしかないか」

「戦われますね」

「ああ。剣士に勝てば」

「はい、もらえるお金はかなりのものです」

「そうだよな。妖怪倒すよりもな」

「遙かに多いです。さらに」

そしてなのだった。さらにだった。

「最後の一人になれば」

「願いは思うがままか」

「それで何を望まれますか？」

「金は闘って得られるしな」

その問題はそれで解決できるというのだ。

しかしだ。その他にはだった。

「けれど人間と戦うのはな」

「お嫌ですか？」

「どうもな。好きになれないな」

中田は少し皮肉な感じの笑みになって話した。

「人間が相手だとな」

「そうですか」

「仕方ないな」

また言う彼だった。

「最後の一人にならないと終わらないんだよな」

「終わらなければです」

「戦いはずっと続くんだよな」

「その通りです。ですから」

「仕方ないな。やるか」

「御願います」

「しかし。それにしても」

中田はここでまた言った。

第三話 見てしまったものその十三

「因果な話だよ。あの高校生嫌いじゃないんだけどな」

「ですがそれが運命ですから」

「剣士の運命だっていうんだな」

「その通りです。最後の一人になるまで戦い」

「願いを手に入れるか」

「中田さんは家族を救いたいのですね」

「だからそれは手術の金さえあればいいんだよ」

「これが彼の考えだった。」

「まあ。金になるな」

「それですね」

「俺は金が欲しい」

「それで戦うというのだ。」

「そうするからな」

「では。そういうことで」

こうした話をするのだった。そして彼もまた去った。

だがその彼の後姿を見る女がいた。彼女は。

聡美だった。聡美は彼を見てその緑の目を曇らせていた。そのうえだ。

こうだ。何も、誰もいないそこに問うたのだった。

「お姉様」

「貴女ね」

「はい、この時代でもですか」

「そうよ」

あの声だ。聡美にも答えるのだった。

「私は。そうして」

「剣士達をこの時代でも弄ぶのですか」

「弄んではいいいわ」

それはきつぱりと否定するのだった。声も。

「私は。ただ」

「共にいたいだけというのですね」

「ええ」

そうだとだ。声は苦い色で聡美に答えた。

「それだけです」

「しかしそれで」

「彼は私の全て」

声は聡美に対して。こう返してきた。

「その彼がいないと」

「ですが。彼等は」

「彼等は罪人でした」

拒む言葉はここでもだった。形こそ変えてもだ。

あくまでだ。聡美の言葉を否定してだった。

「それでどうして同情することなぞ」⁸

「そうして何千年もですか」

聡美はその声にだ。すぎる様にして問い返す。

「彼等を互いに争わせ。命を奪っていくのですか」

「そうです。そしてその命の力こそが」

「だからです。私は」

「貴女はどうしてもですか」

「はい、彼の為に」

どうしてもという言葉でだった。声は言っのだった。

「彼が再び私に笑顔を向けてくれる為に」

「では私は」

聡美はだ。顔を上げてだった。

夜空にいる筈のその姿を見てだ。そのうえでの言葉は。

「その貴女を必ず」

「止めるというのですね」

「彼が貴女にとって大事な人なら」

それならばだというのだ。

「貴女は私にとって大切な人だから」

「そう想ってくれているのですね」

「ですから」

そこにある姿を見てだ。聡美はさらに話す。

「私は必ず貴女を止めます」

「そうしますか」

「必ずです」

こうしたやり取りのうえでだった。聡美は今は声の主と別れたのだった。

そして一人夜の中に消えた。深い憂いと共に。

第三話 完

2011・7・22

第四話 中田の告白その一

久遠の神話

第四話 中田の告白

確かに誰にも言わなかった。しかしだ。

上城と樹里は二人になるとだ。いつもこの話をするのだった。

「あのスフィンクスだったね」

「そうよね。実際にああいうのがいるだけでも驚きだけれど」

「しかも。剣がどうとかって」

「どういうことかしら」

首を捻ってだ。二人は話すのだった。

二人は今学校の校舎の屋上で昼食を食べながら話している。食べているのはパンと牛乳だ。学校の購買部で買ったものだ。

それを食べながらだ。上城は言っのだった。今食べているのはあんなパンだ。

「僕が。っていうけれど」

「水ってね」

「水臭いって意味じゃないよね」

「まさか。それはないわよ」

樹里は上城の半ば冗談めいた言葉にだ。こう返した。

「上城君って水臭くはないから」

「そう。じゃあ何かな」

「うん、だから余計にね」

「わからないわよね」

二人で話していく。

そのわからないという言葉の中でだ。樹里はジャムパン、ジャムはイチゴのものだ。それを牛乳と一緒に口の中に入れながらだ。

彼女はだ。こう言っのだった。

「水ねえ」

「火と水？」

「そんな感じの話だったけれど」

「何かの謎々かな」

こんな風にも考える上城だった。

「ほら、スフィンクスだし」

「そうよね。だとしたら」

「水？僕が？」

「何かを消すのかしら」

「それが飲むか」

水からだ。二人はこうも考えていく。

「うっん、幾ら考えても」

「わからないわよね」

「どうもね」

二人は今は幾ら考えてもだった。

わからずにだ。結局今はだった。

パンを食べそうしてだ。昼食を済ませることにした。その中でだ。樹里は今食べているクリームパンについてだ。こう言った。

「この学校のパンって前から思ってたけれど」

「八条パンのパンだよね」

「美味しいわよね」

中のクリームも味わいながら話す。

「優しい味で」

「パンも柔らかいしね」

「そうよね。しかも安いし」

その安さの理由はだ。ここにあった。

「やっぱり。学校の購買だと」

「そりゃ高いと売れないしね」

「ええ。あと作ってるパンも」

「これとかだよ」

上城はすぐにサンドイッチを出してきた。かなり分厚いチキンカ

ツサンドだ。

それを樹里に見せながらだ。そうして話していく。

「サンドイッチだってね」

「美味しいわよね」

「そうそう。一つ一つにボリュームがあって」

「味もいいし」

「恵まれてるわね」

パンについてもだ。そうだった。

「あとだけれど」

「そう、あとよね」

「飲み物も充実してない？」

「してるわね」

それもだった。いいというのだ。

「牛乳も色々あって」

「野菜ジュースもあってね」

「何かパンだけでも飽きないよね」

「この学校にいたら」

そんな話をしながらパンを食べている二人だった。それが終わってからだ。

二人で教室に戻ると。そこではだ。

新聞が読まれていた。その新聞は。

第四話 中田の告白その二

「んっ、スポーツ新聞？」

「違うみたいよ」

それではないとだ。樹里が上城に話した。

「普通の新聞みたいね」

「そうなんだ」

「ええ。ただ」

その読まれている新聞を見る。するとだった。

そこに写真で出ていたのは。

「中田さんだね」

「そうね。あの人よね」

剣道着に防具の彼がそこにいた。何とだ。

全国大会で優勝したと書かれていた。それを見てだ。

上城がだ。最初に言った。

「凄いね。全国大会で優勝って」

「そうよね。そこまで強いのね」

「強いとは思ってたけれど」

彼にとつてもだ。予想以上だった。

それでだ。上城はこんなことも言った。

「僕も努力して」

「全国大会優勝？」

「無理かな、それは」

自分で言っただけにだ。苦笑いで打ち消したのだった。

「そこまでは」

「まあ。努力次第ね」

それ次第と答える樹里だった。

「結局諦めたらそれで」

「それで終わりだっていうんだね」

「そう。諦めたらね」

本当にだ。それで終わりだというのだ。これが樹里の言葉だった。それでだ。上城にハツパをかけるようにしてこつと言った。

「上城君もあれよ。新聞にああしてね」

「載れる様にだね」

「頑張ったらしいのよ」

こつ言うのだった。

「そうすればいいのよ」

「そうだね。努力してね」

「剣道もよね。稽古すればするだけ」

「どの武道、スポーツでもそうだけれどね」

「じゃあ。そうしたらね」

「いいね」

「そう思うわ」

こつ上城に話す。

「やっぱり人間努力よ」

「言い換えると努力しないと」

「人間駄目よ」

そうなるのだった。逆説的にはだ。

そうした話もした。上城の学園生活は今平和だった。

しかしだ。まただった。

部活の後の下校時間にだ。上城は。

中田と会った。その彼を見てだ。挨拶の後で言ったのだった。

「新聞見ました」

「ああ、あれな」

「凄いですよね」

目を輝かせてだ。彼にこつ言ったのである。

「全国大会で優勝なんて」

「まあなあ。調子もよかったしな」

当人はというとき軽い調子で返してきただけだった。

「特にな」

「凄くないっていうんですか？」

「いや、そう言ったら嫌味だよな」

「嫌味になります？」

「そうなるだろ。まあだからな」

言葉を選んでだ。こう言ったのだった。

「凄いよな。俺って」

「はい、凄いです」

「だよな。全国大会優勝は嬉しいよ」

はにかんだ顔での言葉だった。

第四話 中田の告白その三

「正直やったって感じだよ」

「どうしたら全国大会優勝なんてできるんでしょうか」

「あれだな。戦ってるからだな」

「戦う？」

「だからだろうな」

「こつ話すのだった。」

「だからだな」

「戦うっていいですよ」

「色々あつてな」

何かを隠す口調での言葉だった。

「まあ、いつもそうしてるからな」

「戦ってるんですか」

「実戦が一番なんだよ。強くなるには」

「実戦ですか」

「ああ、そうなんだよ」

それだというのだ。

「戦うのが一番いいんだよ」

「それじゃあ」

中田の話を聞いてだ。上城は。

彼の常識からだ。こつ言ったのだった。

「稽古ですか」

「稽古!？」

「それですよね」

また言う。

「やっぱり」

「いや、まあな」

「まあな？」

「実戦つていつでも色々だからな」

「色々つていいですよ」

「あれだ。とにかく実際に刀持ってやることだよ」

中田はこの辺りはあえてぼかして話した。そしてそれを聞いた上城はというと。

まさか彼が実際に戦っているとは思えずにだ。ただこう言うだけだった。

「そうですか。一本勝負とかかかり稽古とかは」

「まあいいな」

中田はまたぼかして話す。

「とにかく人間な」

「努力ですよな」

「頑張るんだな、あんたも」

「全国大会は無理でも」

それでもたとだ。彼なりに考えて言う。

「頑張りますね」

「ああ、頑張れ」

今度は屈託のない笑顔で言う中田だった。そして上城もだ。彼の言葉の背景までは考えずだ。そのうえでだ。

稽古に身を打ち込むことにしたのだった。それが彼の考えだった。上城は中田と笑顔で別れた。彼はそれで終わった。

だが中田はというと。彼と別れてから。声を聞いた。あの声をだ。

「来ます」

「そうか、またなんだな」

「それでどうされますか？」

「どうするって選択肢は一つしかないだろ」

「戦われますね」

「ああ。相手は何匹だ？」

「一匹です」

声はこう彼に答えた。

「一匹ですが」

「一匹ね。それでも尋常じゃない強さなんだろうな」

「強いと思います」

それは間違いないとだ。声も言う。

「何しろミノタウロスですから」

「ああ、あれか」

ミノタウロスと聞いてだ。中田は納得した顔で頷いた。

そのうえでだ。彼は言った。

「牛の頭のでかい奴だよな」

「そうです。かつてミノス王の迷宮にいた」

「あいつか。あいつが出て来るのか」

「気をつけて下さい。ただ大きいだけではありません」

「力も強くてあれだな」

中田もミノタウロスについては知っている。ギリシア神話において最もよく知られている魔物の一つだ。だからこそ言えるのである。

第四話 中田の告白その四

ミノタウロスというのだ。その恐ろしさの理由は。

「人食うしな」

「かつてラビリンスでは人を生贄にしていました」

「だよな。牛が人食うのか」

「半分は人間ですから」

「ああ、それでか」

半分人間と聞いてた。中田は幾分か納得できた。

「牛だったら草しか食わないが人間だったら肉食うしな」

「そうです。しかしそれはそれで」

「人間が人間食うか」

「確かこの時代の言葉では」

「カニバリズムだったな」

一種の異常な精神病の一つとみなされることもある。人間が人間の肉を口にするということは古代からあったのだ。当然ギリシアでもだ。

「そう言ったな」

「そのカニバリズムです」

「厄介な奴だな」

また言う中田だった。

「俺も油断したらミノタウロスにだよな」

「食べられたいですか？」

「冗談だろ。誰が食われたいんだよ」

中田は笑ってそれはないと答えた。

「そんな奴いるか？」

「そういうことですね」

「食われる位ならな」

それ位ならだと。言いながらだった。

その両手にそれぞれ刀を出す。紅蓮の刀をだ。

そしてそのうえでだ。前を見る。その彼にだった。

声だ。警戒する声で話した。

「来ました」

「前からかよ。後ろからかよ」

「前からです」

「ああ、来たな」

声と言ったその瞬間にだった。

三メートルはあろうかという半裸の筋骨隆々の大男が出て来た。

だがその頭は雄牛のものだ。

そしてその手には巨大な両刃の戦斧がある。身に着けているのは白い腰巻だけで漆黒の身体においてよく目立っている。その巨人こそが。

「あいつか」

「ミノタウロスです」

「そのままの姿だな」

中田は人身牛頭のその巨人を見て言う。

「神話の」

「強さものです」

声はそれもだという。

「そのままですから」

「一歩間違えたらか」

「はい、食べられてしまいます」

「スリル満点だな」

話を聞いてだ。中田は。

シニカルな笑みを浮かべてだ。こう言っただ。

そのミノタウロスを待ちだった。そのうえで。

魔物がだ。斧を上から振り下ろすのを見た。そこでだ。

身体を右に動かす。それで。

斧の一撃をかわす。斧は派手な音を立てアスファルトを破壊した。

硬い筈のそこはまるで豆腐の様に砕けてしまっていた。

それを横目に見つつだ。中田は。

魔物の懷に飛び込んだ。そうしてだ。

その腹にだ。右の刀を突き刺した。

突き刺したそこからだ。赤い炎が怒る。それで焼こうとするのだ。

その中でだ。彼はこうも言った。

「さて、これでな」

「これで？」

「ステーキだな」

笑ってだ。こう声に言った。

「塩と胡椒が欲しいな」

「あの、それは」

「余裕だっていうんだな」

「そう聞こえますけれど」

「戦いつてのは焦った方が負けるんだ」

中田の考えの下にだ。それで言うのだった。

第四話 中田の告白その五

そのうえでだ。さらにだった。

左の刀をだ。左から右にだ。横薙ぎに払った。

それで今度は斬った。しかしだ。

魔物はまだ倒れない。それどころから。

身体を思いきり引いてだ。突き刺さった刀をそれで抜き。

燃え上がる二つの傷を何ともせずだ。再びだ。

斧を振るう。今度は何度も何度もだ。

無造作なまでに振るい中田を叩き斬ろうとする。彼はそれを巧みに動きかわしつた。

そのうえでだ。また声に尋ねた。

「なあ、こいつな」

「体力ですね」

「しぶと過ぎないか？」

こう声に尋ねたのである。

「これはあんまりだろ」

「ですから。神話のままの強さですから」

「元々すげえしぶとかったのか」

「はい」

その通りだとだ。声は答えた。

「そうです」

「参ったな、こりゃ」

中田はその斧の攻撃をかわしながらまた言う。

「一撃でも受けたら終わりだしな」

「そして貴方の攻撃は」

「中々聞かないな」

「そうですね」

まあにそうだと言ってだ。それでだ。

再び攻撃を浴びせる。今度は。
刀をだ、まずは交差させてだ。

それぞれ下から上に一閃させる。それでだ。
アスファルトに紅蓮の炎を走らせ。それで。

魔物にぶつけ足から焼く。その炎で動きを止め。
再び突進してだ。魔物の膝に足をかけ。

一気に跳びその途中にだ。左の刀を一閃させた。

それで魔物を両断しそのうえで焼く。これで決まりだった。

そうしてからだ。着地した彼が見たものは。

今まさに焼かれんとする魔物だった。魔物は立ったまま両断されてそのうえで。

漆黒の身体を焼かれ消えていつていた。そこまで見てだ。

中田は満足した顔になりだ。声に言った。

「これで決まりだな」

「はい、ミノタウロスは滅びました」

「一時はどうなるかって思ったけれどな」

「炎を走らせそしてですね」

「ああ、一気に真つ二つにして焼いてやった」

そうしたと。己の闘いを振り返り話す。

「これならな」

「どの様な体力はある魔物でもですね」

「ああ、倒せる」

それができるといふのだ。

「そう思ってたな」

「考えられましたね」

「焦ってなかったからな」

それでだ。考えられたといふのだ。

「できたんだよ」

「決して焦らないですか」

「だから。焦ったら負けなんだよ」

中田は燃え盛る魔物を見ながらまた言う。

「何でもな」

「焦らない。だから貴方は強いんですね」

「少なくとも強さの元の一つだな」

「そうですね」

「ああ、それで今度の金は」

「はい、もうすぐ出ます」

見れば魔物は今まさに焼き尽くされんとしていた。その後でだというのだ。

そしてその言葉通りだ。それが出て来た。

黄金の棒が数本だ。魔物が消えてから出て来た。それを手に取りだ。

中田は満足した顔になりだ。刀を消してから声に話した。

「報酬だな」

「そしてそのお金で」

「ああ、家族がまた助かる」

こう言うのだった。

「いいことだよ」

「それでなのですが」

「剣士だよな」

「はい、剣士を倒せばです」

彼と同じ立場のだ。その剣士を倒せばというのだ。

第四話 中田の告白その六

「怪物を倒すよりさらにです」

「金に力が手に入るんだよな」

「そうです。ですから」

「好きになれないな」

しかしだ。中田はというと。

難しい顔をしてだ。こう声に言ったのである。

「どうしてもな」

「人と戦うことはですか」

「甘っちょろい考えかも知れないけれどな」

こう言いながらだ。声に返す。

「それでもな」

「人と戦い倒すことはですか」

「したくない」

こうだ。はっきりと言う彼だった。

「化け物相手ならどれだけでもやるがな」

「そうですか。しかし」

「望みを果たす為には」

「最後に一人にならなければいけません」

声の感じは穏やかだ。だが中田にとってはまだ。

峻厳そのものの言葉だった。実に厳しい。

その厳格な言葉を受けてだ。彼はまた言った。

「だよな。しかもだろ」

「はい、最後の一人になるまでです」

「戦いは続けられるか」

「そうです。魔物も永遠に出て来ます」

「手術代だけでいいんだけれどな」

中田は苦笑いになってこう言った。

「けれどどうもな」

「ご両親と妹さんはどうですか？」

「今は延命にしかなくてない」

金を稼いでいるそれがだ。その費用になっているのだ。

それに加えてなのだ。家族を助けたければ

「やっぱり手術が必要だ。それにな」

「それに？」

「手術は絶対に成功するそうだ」

それは間違いないというのだ。

しかしだ。中田は顔を曇らせてまた言った。

「けれどそれでもな」

「完治はですか」

「無理みたいだな。怪我が予想よりずっと酷くてな」

「では最後の一人になります」

そのうえでだというのだ。声は。

「願われれば」

「皆元通りになるんだな」

「そうなります。ですから」

「やるしかないんだな」

中田は溜息をついた。しかしそれでも言ったのだった。言っしかなかった。

「そうなんだな」

「そうです。その為には」

「わかったさ」

浮かない顔でだ。首を横に振って頭垂れてだ。

中田は声に答えた。そうして言うのだった。

「他の奴ともな」

「戦われますね」

「ああ、そうする」

こう答えた彼だった。そう答えるしかなかった。

「これからもな」

「はい、それでは」

「じゃあ。今は金はどうして貰ったしな」

手の中のもの黄金の棒を見てだ。そのうえでの言葉だ。

「とりあえずはこれでいいよな」

「今は」

「これで帰るさ」

そうするとだ。中田は声に答えた。

「じゃあな」

「はい。それでは」

こうした話をしてだった。声も別れの言葉を言った。

その別れの言葉を受けてだ。中田はその場所を去ろうと踵を返した。だがその彼の前にだ。

上城がいた。そうしてだ。

表情を強張らせてだ。彼はそこに立っていた。

何も話さない。しかしだ。それでも目で言っていた。

その目を見てだ。中田も言う。

第四話 中田の告白その七

「見たんだな」

「それは」

「何時から見てたんだ？それで」

「途中。財布を落としてることに気付いて」

「それで戻ったというのだ。見れば上城のその手にはだ。
黒い財布がある。それを落としたことは明らかだった。
その財布を見ながらだ。彼は話す。」

「それで戻って来て」

「見たんだな」

「あの牛の怪物が出た時から」

「その時代からだというのだ。」

「見るつもりはなかったですけれど」

「いや、あんたもな」

「しかしだ。中田はだ。」

「その上城にだ。こう言った。」

「聞いた筈だよ。水なんだろ」

「そのことですか」

「ああ、あんたは水の剣士なんだよ」

「剣士って」

「ここだ。あの声があった。」

「上城に対してだ。こう言ってきたのだった。」

「剣士は全員で十三人です」

「十三人！？」

「はい、それだけの剣士がいて」

「それでだとだ。さらに言うのだった。」

「残るのは一人です」

「一人・・・・・・・・」

「つまりあれだよ」

声と入れ替わる形でだ。中田も上城に話す。

「俺達は魔物、さっきのな」

「あの牛の化け物ですよね」

「もう他にも会ってないか？」

中田はそのことも推察して彼に尋ねた。

「何かな。さっきのとは別に」

「実は」

ここでだ。中田に対してあのことを話した。

「前にスフィックスですか？」

「彼女ですね」

声がだ。スフィックスと聞いて上城に伝えてきた。

「あの獅子の身体に女の頭と胸を持ち」

「それで翼が生えていました」

「そう、彼女ですね」

声はだ。知っているといった感じだった。

その声でだ。あらためて話すのだった。

「彼女と会ってですか」

「その水のことを言われました」

「そうでしょうね。しかしです」

「あれは事実だったんですか」

「事実だからこそです」

ここでだ。声は上城にこうも話した。

「貴女は彼女と会ったのです」

「そういうことですね」

「そうなります。最初は信じられませんでしたね」

「何ていいですか」

上城は素直にだ。声に対して答えた。

「あれですね。実際にああした魔物がいるのは」

「それ自体がですね」

「想像できないでしょ。あんな非現実的な存在」

「現実とは曖昧なものです」

その現実についてはだ。声はこう言って上城に返した。

「実際にどうかというんです」

「ああした存在も成り立つんですか」

「そうです。現実には神々の匙加減でどうともなります」

「神々!？」

「そう、神々のです」

どういった神々なのかは言わずにだ。

声はだ。あらためてこうも話してきた。

「それでどうともなるものですから」

「何かよくわからないですけど」

「つまりです。神々の裁量一つで」

「ああした魔物もですか」

「この世に存在します。そうしてです」

声は話の本題に入った。それこそがだった。

第四話 中田の告白その八

「剣士もまたです」

「いるんですか。十三人も」

「貴方も含めて」

「それでだ」

また中田が上城に話してきた。

「願いを適えたければな。お互いに戦ってだ」

「願いをですか？」

「願いは。まあ何でもいいみたいだな」

そのこと自体についてはだ。無頓着な感じだった。

「けれど。願いを適えたいとな」

「あの、願いが特になかったら」

その場合はどうなのか。上城はいぶかしむ顔になりその場合について尋ねた。

「別に戦わないでいいですよね」

「そうはいきません」

しかしだった。このことはだ。

どうかとだ。声はすぐに言ってきた。

「剣士になるのは運命ですから」

「運命って」

「はい、運命だからです」

それでだ。どうかというのだ。

「必ず戦わなければならないのです」

「そんな、無茶苦茶じゃないですか」

「まあそうだよな」

中田もだ。その何が何でも戦わないといけないことについては同意だった。

だがそれと共にだった。彼はこうも言った。

「けれど願いがない人間なんているか？」

「そのことですか」

「ああ。そんな奴いるか？」

問うのはこのことだった。

「何もない奴なんてな」

「それは」

「そうだろ。誰だって大なり小なりな」

「願いはあるからですね」

「それを適える為に戦ってだよ」

「最後の一人になつて」

「ああ、願いを適えるんだよ」

そのことをだ。上城に話した。

「どうだよ。願いがなくてもな」

「戦わないといけなくて」

「最後の一人になればな」

戦った結果だ。そうなればというのだ。

「願いが適うんだよ」

「僕の願いが」

「で、どうするんだ？」

中田はあらためて上城に尋ねた。

「あんたはな」

「僕は」

「一つ言つとくけれど戦うことから逃げられないぜ」

それはだ。絶対だというのだ。

「その選択肢は絶対なんだよ」

「じゃあ後は」

「願うかどうかだよ」

それだというのだ。

「どうするんだ、それで」

「それは」

「水の剣士よ」

声もだ。また彼に言う。

「剣ですが」

「あつ、それですか」

「それは出ると思えばです」

「出て来るんですか」

「貴方の手の中に」

そこにだ。出て来るというのだ。

「そうなります」

「どんな形の剣でもな。あんたがイメージすればな」

どうかとだ。ここでも話す中田だった。

「手の中に出て来るんだよ」

「それでその剣で」

「戦うんだよ。俺だつてな」

「中田さんですか」

「ほら、こうしてな」

実際にだ。彼はここで刀が出ると念じた。するとだ。

その両手にだ。二本の刀が出たのだった。

その赤い燃え盛る炎を思わせる刀をだ。上城に見せながらだった。

そのうえだ。また上城に言うのである。

第四話 中田の告白その九

「念じれば出て来るんだよ」

「日本刀ですか」

「だから。どんな剣かはな」

それはだというのだ。このことはまた話す彼だった。

「剣士それぞれがイメージする奴だからな」

「人それぞれですか」

「その剣士のな。じゃああんたはどんな剣なんだ？」

どういったものをイメージするか。それを問うた中田だった。

「ちよつと念じてくれよ」

「それじゃあ」

その言葉を受けてだった。上城は。

実際にだ。自分の両手の平を見ながらだ。

念じるとだ。出て来たのは。

青い刀身だった。日本刀だ。ただしだ。

その長さはかなりのものだ。メートル半に達する。そしてその刃は青く冷たく輝いている。その刀を見て中田はこう上城に言った。

「それだよ」

「この刀がですね」

「ああ、あんたの剣だよ」

それこそがだというのだ。

「そうなるからな」

「じゃあこの刀で」

「そうです」

また声言ってきた。中田に代わって。

「魔物と。そして外の剣士達と」

「戦ってそうして」

「貴方の願いを適えるのです」

「それが僕の運命なんですね」

「既に決まっていることです」

そのことからだ。どうしても逃れられないと告げる声だった。

「そういうことですから」

「わかりました」

上城は納得できなかった。しかしだ。

それでもだ。懽然としながらも声に対して頷いてみせたのだった。

そのうえでだ。中田を見てだ。彼に問うた。

「なら今からですか」

「ああ、俺とか」

「戦わないといけないんですか？」

彼を見てだ。問うたのである。

「そうなんでしょうか」

「ああ、今はな」

「今は？」

「俺はこれで帰るからな」

そうするとだ。彼は軽い笑顔で上城に告げた。

「今日はなしにしておこうな」

「戦わないっていうんですか」

「そうするさ。じゃあな」

挨拶をして右手を軽くあげてだ。それから上城に背を向けた。

そのまま去る。上城はその背を見送るだけだった。その彼にだ。

声がだ。ここでも言ってきたのだった。

「では今日はです」

「これで終わりですか」

「はい、そうなります」

まさにそうだというのだ。

「とりあえず貴方は剣を手にされました」

「それでこの剣で」

「貴方の願いを適えて下さい」

「僕の願いつて」

そう言われてもだった。

上城は考える顔になってだ。それでだった。

洸だ。声に対して答えた。

「まだそれは」

「ありませんか」

「はい、ないです」

そうだというのだ。

「いきなりですし。それに」

「それにとは」

「僕今の状況で満足してますし」

だからだ。それでだというのだ。

「特に何も」

「そうですか。それではです」

「それではって？」

「願いは見つけて下さい」

それはだ。そうしてくれという声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2979v/>

久遠の神話

2011年10月9日03時12分発行